掲載記事の無断転載転写を禁じます

平成18年3月31日発行

鵠沼

久久比奴末

はまゆうと桜貝と
海光るわが故里

第９２号

鵠沼を語る会創立30周年記念号-その2

鵠沼を語る会 30年の歩み

1．「鵠沼を語る会」の生い立ち … 有田　裕一・佐藤　和子 … 1
2．**鵠沼を語る会略年表** …… 佐藤　和子・竹内　広弥 … 6
3．**鵠沼を語る会歴代会長** …… 竹内　広弥 … 12
4．**項目別活動状況** …佐藤　和子・竹内　広弥・渡部　　瞭 … 13

創立30周年記念事業のまとめ …… 竹内　広弥 … 23
1．千葉県我孫子市と鵠沼の不思議な縁 …… 渡部　　瞭 … 25
2．白樺派ゆかりの我孫子を訪ねる …… 岡田　哲明 … 27
3．**鵠沼ゆかりの文化人展** …… 浅野　陽子 … 30
4．公開講座　鵠沼学入門（Ⅰ・Ⅱ）…… 渡部　　瞭 … 32
5．特別講演会「鵠沼残照」～白樺派と教養派～　小山　文雄 … 33
6．会誌『鵠沼』記念号の発行 …… 渡部　　瞭 … 53
7．**記念植樹** …… 穴山　雄一 … 54

「鵠沼を語る会」活動の記録 …… 総　務　部 … 55

編集後記 …… 58

『新編相模風土記稿』（天保１３年、１８４２）に、「鵠沼村久久比奴牟良」
とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵠沼を語る会 発行

「鵠沼を語る会」の生い立ち

有田　裕一（会員）
佐藤　和子（会員）

会誌「鵠沼」の創刊第1号(昭和51年7月発行)の巻頭に次の一文が寄せられている。

＊　＊　＊

『日本で最も気候温暖にして　空気も清く別荘地として昔から知られている鵠沼は、現在京浜工業地帯の衛星都市として日々発展しています。藤沢市の中でも殊に住宅地として最高の土地であることは、誰でも知っているところでありますが、鵠沼は昔どんな土地であったか、歴史をひもといてみるのも一寸興味深いものであります。それで　この鵠沼公民館に「鵠沼を語る会」ができたわけです。興味をお持ちの方が一堂に集まり研究をしております。
――(以下略)』

前鵠沼公民館長　高松敏夫

＊　＊　＊

また「語る会」の元会長高木和男氏は、平成8年8月会誌「鵠沼」の合本をつくる際、作成委員長として次のように述べている。

＊　＊　＊

『――(前略)この鵠沼海岸には明治中頃、華族、豪商、実業家の広大な屋敷が別荘として建ち始めました。やがて関東大震災で建物は一新されましたが、その後も財界人や著名な文人たちに人気があり、湘南の別荘地としてつとに有名でした。

その時代を知っている老人たちが体験談を話し合ったのが「鵠沼を語る会」の誕生となったのです。当時開館間もない頃の鵠沼公民館では、主催事業のひとつとして、この忘れられる恐れのある郷土の歴史を記録として取り上げる意図で会をつくり、初代会長に伊藤昌氏が推されました。氏の識見と精力的なリーダーシップにより会の方向が決まり、さらに2代目伊藤節堂氏の文学的才能とまれにみる探求心により引き継がれ初期の体制が確立されました。この会の発足は鵠沼公民館8代目の館長高松敏夫氏のときでしたが、

この企画を実らせて現在まで継続してこの会の世話を引き受けて面倒をいとわず労力を提供されたのは9代目館長だった吉田興一氏でした。』

＊　＊　＊

この二つの文章を読み合わせると、「鵠沼を語る会」の実質的な生みの親は「鵠沼公民館」であったと思われる。

鵠沼公民館が創設されたのは昭和 34 年、藤沢市で最初にできた公民館の一つで、当初から住民の意向をとり入れ、文化・地域活動を支えていた。当時は結婚式なども執り行われており、昭和 44 年には文部大臣より表彰を受けたり、小学校の教科書にも掲載されている。その公民館活動の一つとして、郷土の歴史が忘れ去られないうちに語り継いでいこうとする試みがなされ、「語る会」誕生の因となった。

その後ある機会に、「鵠沼を語る会」の発足当初、公民館の職員として前出吉田 9 代目館長と共に、「語る会」にかかわっておられた方から、当時のお話を聞くことができた。昭和 50 年頃になると公民館の活動も軌道に乗ってきたものの、集まってくる人たちは昼間家にいることの多い女性たちが中心となっていたので公民館としては、さらに“地域のことを学ぶ成人男性層も参加するようなサークル”の発足も望まれており、そのような趣旨のビラをつくって、鵠沼海岸の駅などで配ったり、地元の人たちに声を掛けたりと積極的に働きかけた。その結果「鵠沼のことを知ろうではないか」ということで数人の男性が集まり、これが「語る会」発足の第一歩となった。

こうして昭和 50 年、伊藤昌氏がリーダー(後に会長)となって「鵠沼を語る会」は正式に発足、昭和 51 年 7 月、会誌「鵠沼」第 1 号を発行した。手書き、青焼きの十数ページの小冊子だが、内容は工夫され興味深い。当初の会誌には会員だけではなく、公民館で活動していた高齢者学級の人たちにも原稿を依頼して鵠沼との関わりなどの寄稿を受けていた。初めの頃の会誌を見ると、伊藤昌、富士山、高木和男、吉田興一、奥田直元、花輪桂、伊藤節堂などのお名前が見え、それぞれの立場で会をまとめて行かれた方々のお顔が偲ばれる。

それから 30 年、私たちは鵠沼公民館はじめ地域住民の方々の大きな支持のもとに、先輩たちの志を継いで活動を続けてきた。その大略は次の「語る会」年譜を見ていただきたい。

しかし、その中に一つ別記しておきたいのは、旅館「東屋」の所在を示す記念碑の設置である。

東屋跡石碑設置まで

藤沢市には美術館も博物館も、一般公開される公の資料館もない。それ以上に近隣他市と比べ史跡を示す碑の少ないことは誰もが感ずることであった。

語る会でも東屋の研究は過去何度も取り上げられたが、現在往時の面影はほとんど見受けられなくなったのは残念であり、今のうちに、その位置、規模や業績を将来に残す必要性を痛感していた。

平成 8 年ごろ、市側の道上氏他の担当者と公民館で話合いがもたれたのを初め

・平成10年11月10日

生涯学習課、鈴木氏、篠崎氏、神奈川文学振興会理事、作家の佐江衆一氏らと会合がもたれ、小山文雄氏も賛同、県近代文学館・文学振興会理事長=中野孝次氏の名で藤沢市に要望書を出したとのことで、この時点で「鵠沼を語る会」と「神奈川文学振興会」の共同歩調がとれ、市側からも平成 12 年には予算化できるよう努力したいとの発言があった。

・平成10年12月17日

「設置検討委員」として最初の会合、市側の方と共に東屋周辺を歩き説明する。

・平成11年1月19日

市役所にて会合　佐江氏他、市側　鈴木氏、篠崎氏、星野課長。プレハブでも文人資料館の話も出たが、東屋記念碑一本にしぼる。

・平成11年3月23日

市に要望書を提出、行政に対して形式を整える。長谷川家と右近家に計画を伝える。

・平成11年10月

永井家の内諾を得る。

・平成11年11月9日

鈴木主幹より来年 2 月に市議会に予算提出との話。

・平成12年3月4日

6 月の補正予算で決定の予定

東屋跡石碑設置まで

藤沢市には美術館も博物館も、一般公開される公の資料館もない。それ以上に近隣他市と比べ史跡を示す碑の少ないことは誰もが感ずることであった。

語る会でも東屋の研究は過去何度も取り上げられたが、現在往時の面影はほとんど見受けられなくなったのは残念であり、今のうちに、その位置、規模や業績を将来に残す必要性を痛感していた。

平成 8 年ごろ、市側の道上氏他の担当者と公民館で話合いがもたれたのを初め

・平成10年11月10日

生涯学習課、鈴木氏、篠崎氏、神奈川文学振興会理事、作家の佐江衆一氏らと会合がもたれ、小山文雄氏も賛同、県近代文学館・文学振興会理事長=中野孝次氏の名で藤沢市に要望書を出したとのことで、この時点で「鵠沼を語る会」と「神奈川文学振興会」の共同歩調がとれ、市側からも平成 12 年には予算化できるよう努力したいとの発言があった。

・平成10年12月17日

「設置検討委員」として最初の会合、市側の方と共に東屋周辺を歩き説明する。

・平成11年1月19日

市役所にて会合　佐江氏他、市側　鈴木氏、篠崎氏、星野課長。プレハブでも文人資料館の話も出たが、東屋記念碑一本にしぼる。

・平成11年3月23日

市に要望書を提出、行政に対して形式を整える。長谷川家と右近家に計画を伝える。

・平成11年10月

永井家の内諾を得る。

・平成11年11月9日

鈴木主幹より来年 2 月に市議会に予算提出との話。

・平成12年3月4日

6 月の補正予算で決定の予定

・平成12年4月11日

生涯学習課杉山氏、水谷氏、木下氏　来鵠。具体的作業に入る。

・平成12年6月

補正予算案　可決される。

・平成12年10月

永井家から正式な了承を得る。

・平成12年10月

「設置検討委員会」最終打ち合わせ。

・平成13年2月3日

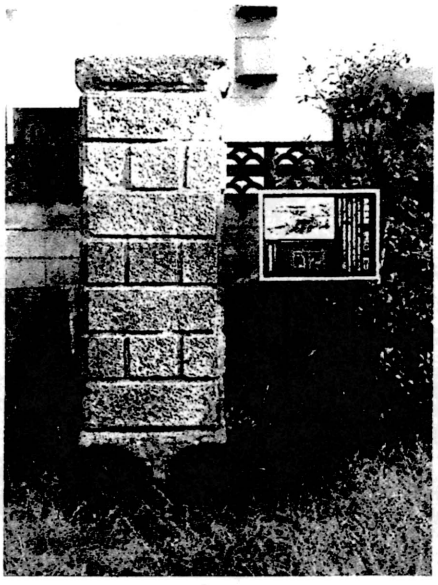
碑の姿が具体的に示され、商店街標柱　小田急鵠沼海岸駅の案内板　公民館案内板　の設置が決まる。

・平成13年3月22日

碑　除幕式　　山本市長、松井教育長、佐江衆一氏、小山文雄氏、川上恵久会長により除幕される。

この間、碑の設置位置の決定には、紆余曲折があった。

石碑及び説明板の設置には、市道路課では道路上での設置は認めず、これにより「東屋」の名に相応しい私有地を探したのであるが、幸い永井家御兄弟の御理解により、碑の方は東屋正門跡への設置が可能になった。説明板の方は他所へとのお話で、東屋海浜口方面の各家々への設置を考え、交渉を試みたのであるが、進行せず、最終的に永井家の御理解を得、石碑の脇へ並べることが出来、ベストの形となったのである。



また、平成 17 年には、唯一の遺構として遺されていた海浜口の門柱までが開発の名目で取り壊されることになったので、それを鵠沼公民館の庭へ移し、跡地の石畳を整備し、プレートを設置するようになったことも、地域の歩みを見続けてきた「語る会」の活動の結果といえよう。

（ありた　ひろかず・さとう　かずこ）

・平成12年4月11日

生涯学習課杉山氏、水谷氏、木下氏　来鵠。具体的作業に入る。

・平成12年6月

補正予算案　可決される。

・平成12年10月

永井家から正式な了承を得る。

・平成12年10月

「設置検討委員会」最終打ち合わせ。

・平成13年2月3日

碑の姿が具体的に示され、商店街標柱　小田急鵠沼海岸駅の案内板　公民館案内板　の設置が決まる。

・平成13年3月22日

碑　除幕式　　山本市長、松井教育長、佐江衆一氏、小山文雄氏、川上恵久会長により除幕される。

この間、碑の設置位置の決定には、紆余曲折があった。

石碑及び説明板の設置には、市道路課では道路上での設置は認めず、これにより「東屋」の名に相応しい私有地を探したのであるが、幸い永井家御兄弟の御理解により、碑の方は東屋正門跡への設置が可能になった。説明板の方は他所へとのお話で、東屋海浜口方面の各家々への設置を考え、交渉を試みたのであるが、進行せず、最終的に永井家の御理解を得、石碑の脇へ並べることが出来、ベストの形となったのである。

また、平成 17 年には、唯一の遺構として遺されていた海浜口の門柱までが開発の名目で取り壊されることになったので、それを鵠沼公民館の庭へ移し、跡地の石畳を整備し、プレートを設置するようになったことも、地域の歩みを見続けてきた「語る会」の活動の結果といえよう。

（ありた　ひろかず・さとう　かずこ）

鵠沼を語る会略年表

（調査：佐藤　和子・竹内　広弥）

1975（昭和50）年

「鵠沼を語る会」　の設立準備（5月）

第１回会合　参集者 番場定八、福地誠一他（11月）

1976（昭和51）年

会誌『鵠沼』１号（鵠沼海岸の海水浴），２号発行（7月、10月）

座談会『海水浴と鵠沼』（7月）

鵠沼の史跡散歩（9月）

1977（昭和52）年

会誌『鵠沼』３号，４号発行

鵠沼地区公民館まつりに参加（2月）

1979（昭和54）年

会誌『鵠沼』５号，６号，７号，８号発行

講演「鵠沼の歴史Ⅰ」「鵠沼の歴史Ⅱ」有賀密夫（2、3月）

公民館まつりに参加（3月）

講演「鵠沼と文学」「鵠沼と白樺派」伊藤昌（会員）（3月、7月）

座談会「鵠沼と震災」（9月）

鵠沼の史跡散歩（10月）

講演「史跡天然記念物」中丸和伯（12月）

1980（昭和55）年

会誌『鵠沼』９号、10号発行

鵠沼の史跡散歩：鵠沼神明地区の石仏、記念碑、社寺（6月）

1981(昭和56)年

会誌『鵠沼』11号発行

座談会「鵠沼の今昔を語る」(5月)

『鵠沼寺院考と砥上が原旅情』刊行(7月)

東久彌宮王子遭難記念碑の移転願い(7月)

1982(昭和57)年

熱海市に開館のMOA美術館見学(1月)

文化財保存を全市に拡げる活動(1月)

1983(昭和58)年

会誌『鵠沼』12, 13, 14, 15, 16, 17号, 58年合併号発行

公民館まつりに参加—クゲヌマランの写真展示(11 月)

1984(昭和59)年

会誌『鵠沼』18, 19, 20, 21, 22, 23号発行

公民館まつりに参加(11月)

1985(昭和60)年

会誌『鵠沼』24, 25, 26, 27, 28, 29号発行

1986(昭和61)年

会誌『鵠沼』30, 31, 32, 33, 34号発行

史跡見学会:藤澤北部の寺社見学(5月)

10周年記念講演会「私の鵠沼と文学」阿部昭(10月)

1987(昭和62)年

会誌『鵠沼』35, 36, 37, 38, 39号発行

第1回総会開催（4月）
史跡見学会：茅ヶ崎・辻堂・藤沢地区文化財見学（5月）
「ふるさとまっぷ鵠沼地区」作成（3月）
公民館まつりに参加―鵠沼道祖神拓本展と道祖神めぐり（10月）

1988（昭和63）年

会誌『鵠沼』40, 41, 42, 43, 44, 45号発行
史跡見学会：藤澤東部・遊行寺・村岡 ・片瀬・川名めぐり（5月）
公民館まつりに参加―ふるさと民芸家屋展（10月）

1989（平成元）年

会誌『鵠沼』46, 47, 48, 49, 50号発行
「鵠沼懐古展」開催（3月）
史跡見学会：
　　宮ヶ瀬ダムと伊勢原日向薬師御本尊開扉・大法要（4月）
日本民家園見学会（7月）
公民館まつりに参加―ふるさと民芸家屋と山草展（10月）
市と協力して鵠沼5箇所に案内看板設置（12月）

1990（平成 2）年

会誌『鵠沼』51, 52, 53, 54, 55, 56号発行
史跡見学会：南足柄路の文化財をたずねて（6月）
公民館まつりに参加―里に息づく馬頭観世音（10月）

1991（平成 3）年

会誌『鵠沼』57, 58, 59, 60, 61, 62号発行
史跡見学会：三浦半島の文化財をたずねて（5月）
公民館まつりに参加－引地川を調べてみれば（10月）

1992(平成 4)年

会誌『鵠沼』63,64, 65号発行

藤澤北部の自然と文化財を巡る旅Ⅰ (5月)

公民館まつりに参加ー芥川龍之介生誕100年ゆかり展 (10月)

1993(平成 5)年

会誌『鵠沼』66,67,68号発行

藤澤北部の自然と文化財を巡る旅Ⅱ (5月)

「芥川龍之介と鵠沼」試写会 (5月)

講演会「近世鵠沼村の暮らし」荒木良正 (7月)

公民館まつりに参加ー鵠沼の歴史とくらし・雨乞い (10月)

鵠南小学校出張授業 (11月)

1994(平成 6)年

会誌『鵠沼』69,70号発行

岸田劉生「村娘像」のモデルに話を訊く　川戸マツ (10月)

公開講座「鵠沼海岸別荘史と岸田麗子の思い出」

高木和男,逸見千鶴子(10月)

史跡見学会:藤澤北部・高谷天神宮

公民館まつりに参加ー子どもの遊び (10月)

「鵠沼のくらし」をJR地下通路で展示

1995(平成 7)年

会誌『鵠沼』71号,72号発行

公民館サークル作品展ー昔の遊び　JR地下道 (2月)

公民館まつりに参加ー鵠沼南部の道 (10月)

史跡見学会:江の島の地理と史跡

1996(平成 8)年

会誌『鵠沼』73,74号発行

公民館まつりに参加ー鵠沼を語る会20年のあゆみ（10月）

1997(平成 9)年

会誌『鵠沼』75号発行

湘南学園生徒に鵠沼についての話（5月）

公開講座「村川堅太郎と松が岡公園」村川夏子（9月）

公民館まつりに参加ー写真に見る鵠沼の現在と昔（10月）

史跡見学会:茅ヶ崎市文化資料館・平塚市博物館見学（11月）

1998(平成10)年

会誌『鵠沼』76,77号発行

渡辺邸保存活動を始める

講演会「鵠沼・東屋旅館物語」高三啓輔（会員）（2月）

公民館まつりに参加ー鵠沼の別荘(10月)

史跡見学会：大磯 吉田邸・大隈邸などを訪ねる（10月）

1999(平成11)年

会誌『鵠沼』78,79号発行

公開講座

「女學世界に咲いた花」-内藤千代子について 森山敬子（1月）

東屋記念碑設置の要望書を提出（3月）

「鵠っ子スクエア探訪スペシャル」

鵠沼南地区史跡めぐりに協力（5月）

座談会「本村地域に残された生活と慣習」萬福寺にて（6月）

公開講座「少年の頃の鵠沼」葉山峻（9月）

公民館まつりに参加ー塩沢コレクションから（10月）

史跡見学会：鵠沼本村地区（11月）

2000(平成12)年

会誌『鵠沼』80,別冊特集総目次(1～80号),81号発行

座談会「わが商店街の歴史を語る」(1月)

座談会「商店街を陰で支えた女性たち」(7月)

公民館まつりに参加ー鵠沼商店街の今昔(10月)

史跡見学会:辻堂南部の史跡を訪ねて(11月)

2001(平成13)年

会誌『鵠沼』82,83号発行

東屋跡記念碑除幕式に出席(3月)

東屋記念碑完成記念公開講座

「東屋と文士たち」小山文雄「蜃気楼を中心に」佐江衆一(6月)

公民館まつりに参加

ー華ひらいた鵠沼文化・東屋と文人たち(10月)

「鵠沼海岸商店街100年の歴史」「鵠沼海岸開発史の概略」刊行(10月)

史跡見学会:江の島道を歩く(11月)

座談会「鵠沼のむかし語り」大東町内会館にて (11月)

2002(平成14)年

会誌『鵠沼』84,85号発行

J-COM湘南藤沢局、しおかぜ湘南ー文学散歩会員の案内で取材(2月)

松が岡公園にモモの苗木を植樹(鵠沼探求クラブと共に、3月)

J-COM湘南藤沢局、市広報番組パステルタイム取材協力(4月)

ホームページを開設(8月)

「華ひらいた鵠沼文化展」を市教委と共催で開催(9月)

鵠沼中学校文化祭に協力(9月)

「秋の鵠沼文学講座と文学散歩」に協力(市観光協会主催10月)

公民館まつりに参加－鵠沼の半纏を展示（10月）
「ふじさわこどもまちづくり会議」に協力（11月）

2003（平成15）年

会誌『鵠沼』86, 87号発行
鵠沼松が岡～藤が谷の著名人旧宅を巡る会（4月）
講演「鵠沼の風土と歴史」（4月）
鵠沼中学校生徒の総合的な学習に協力（6月）
史跡めぐり：東屋の面影をたずねて（7月）
NHK「新日曜美術館」岸田劉生の鵠沼時代再現で協力（10月）
公民館まつりに参加－写真で見る鵠沼の今昔展（郷土資料展示室と共催10月）

2004（平成16）年

会誌『鵠沼』別冊『今井達夫著作品復刻号』, 88, 89号発行
史跡めぐり：鵠沼西部の文化人居住跡及び史跡めぐり（4月）
公民館まつりに参加－鵠沼浦の地引き網 を展示（10月）
辻堂茂兵衛資料館訪問（11月）

2005（平成17）年

会誌『鵠沼』90, 91号発行
東屋海浜口門柱を公民館に移設（5月）
30周年記念 白樺派ゆかりの我孫子を訪ねる
（展示室主催 、語る会企画6月）
30周年記念 公開講座「鵠沼学入門Ⅰ」渡部瞭（会員）（7月）
30周年記念 鵠沼ゆかりの文化人展
（郷土資料展示室と共催10月－06年1月）
30周年記念 講演会
「鵠沼残照－白樺派と教養派」小山文雄（公民館と共催11月）

2006(平成18)年

会誌『鵠沼』92号発行

30周年記念 公開講座「鵠沼学入門Ⅱ」渡部瞭（会員）（2月）

30周年記念 記念植樹（千代枝垂れ桜）（3月）

「鵠沼を語る会」
歴代会長

（調査:竹内　広弥）

伊藤　昌	1976(昭和51)年度～	※初期はリーダー
伊藤　節堂	1982(昭和57)年度～	
塩沢　務	1986(昭和61)年度～	
寺田　良夫	1991(平成 3)年度～	
高木　和男	1995(平成 7)年度～	
川上　恵久	1999(平成11)年度～	
伊藤　聖	2002(平成14)年度～	
有田　裕一	2003(平成15)年度～	

「鵠沼を語る会」項目別活動状況

調査:佐藤　和子・竹内　広弥・渡部　　瞭

鵠沼地区公民館まつり

1977(昭和52)年　初参加（内容不詳 2月）
1979(昭和54)年　参加　（内容不詳 3月）
1983(昭和58)年　クゲヌマランの写真展示（11 月）
1984(昭和59)年　参加　（内容不詳 11月）
1987(昭和62)年　鵠沼道祖神拓本展と道祖神めぐり
1988(昭和63)年　ふるさと民芸家屋展
1989(平成 元)年　ふるさと民芸家屋と山草展
1990(平成 2)年　里に息づく馬頭観世音
1991(平成 3)年　引地川を調べてみれば
1992(平成 4)年　芥川龍之介生誕100年ゆかり展
1993(平成 5)年　鵠沼の歴史とくらし・雨乞い
1994(平成 6)年　こどもの遊び
1995(平成 7)年　鵠沼南部の道
1996(平成 8)年　鵠沼を語る会20年のあゆみ
1997(平成 9)年　写真に見る鵠沼の現在と昔
1998(平成10)年　鵠沼の別荘
1999(平成11)年　塩沢コレクションから
2000(平成12)年　鵠沼商店街の今昔
2001(平成13)年　華ひらいた鵠沼文化・東屋と文人たち
2002(平成14)年　鵠沼の半纏を展示
2003(平成15)年　写真で見る鵠沼の今昔展（資料展示室と共催）
2004(平成16)年　鵠沼浦の地引き網 を展示

*1987(昭和62)年以降は10月開催

講演会・公開講座・座談会

1976(昭和51)年　座談会『海水浴と鵠沼』(7月)

1979(昭和54)年　講演「鵠沼の歴史Ⅰ・Ⅱ」有賀 密夫 (2・3月)

講演「鵠沼と文学」「鵠沼と白樺派」伊藤 昌 (会員3・7月)

座談会「鵠沼と震災」(9月)

講演「史跡天然記念物」中丸 和伯 (12月)

1981(昭和56)年　座談会「鵠沼の今昔を語る」(5月)

1986(昭和61)年　10周年記念講演会「私の鵠沼と文学」阿部 昭 (10月)

1993(平成 5)年　試写会「芥川龍之介と鵠沼」(5月)

講演会「近世鵠沼村の暮らし」荒木 良正 (7月)

1994(平成 6)年　公開講座「鵠沼海岸別荘史と岸田麗子の思い出」

高木 和男、逸見千 鶴子

岸田劉生「村娘像」のモデルに話を訊く　川戸 マツ (10月)

1997(平成 9)年　公開講座「村川堅太郎と松が岡公園」村川 夏子 (9月)

1999(平成11)年　公開講座「女學世界に咲いた花」-内藤千代子について

森山 敬子 (1月)

座談会「本村地域に残された生活と慣習」(於: 萬福寺6月)

公開講座「少年の頃の鵠沼」葉山 峻 (9月)

2000(平成12)年　座談会「わが商店街の歴史を語る」(1月)

座談会「商店街を陰で支えた女性たち」(7月)

2001(平成13)年　東屋記念碑完成記念公開講座

「東屋と文士たち」「蜃気楼を中心に」小山 文雄・佐江 衆一(6月)

座談会「鵠沼のむかし語り」(於: 大東町内会館11月)

2003(平成15)年　講演「鵠沼の風土と歴史」(4月)

2005(平成17)年　30周年記念公開講座「鵠沼学入門Ⅰ」渡部 瞭 (会員7月)

30周年記念講演会「鵠沼残照－白樺派と教養派」小山 文雄

(鵠沼公民館と共催 11月)

2006(平成18)　30周年記念公開講座「鵠沼学入門Ⅱ」渡部 瞭 (会員2月)

史跡見学会

1976(昭和51)年　鵠沼の史跡散歩（9月）
1979(昭和54)年　鵠沼の史跡散歩（10月）
1980(昭和55)年　鵠沼の史跡散歩：石仏、記念碑、普門寺、皇大神宮、
　　万福寺、空乗寺、大橋重政の墓（6月）
1982(昭和57)年　熱海市に開館のＭＯＡ美術館見学（1月）
1986(昭和61)年　藤澤北部の寺社見学（5月）
1987(昭和62)年　茅ヶ崎・辻堂・藤沢地区文化財見学（5月）
1988(昭和63)年　藤澤東部・遊行寺・村岡　・片瀬・川名めぐり（5月）
1989(平成元)年　宮ヶ瀬ダムと伊勢原日向薬師御本尊開扉・大法要（4月）
　　川崎市立日本民家園見学会（7月）
1990(平成 2)年　南足柄路の文化財をたずねて（6月）
1991(平成 3)年　三浦半島の文化財をたずねて（5月）
1992(平成 4)年　藤澤北部の自然と文化財を巡る旅Ⅰ（5月）
1993(平成 5)年　藤澤北部の自然と文化財を巡る旅Ⅱ（5月）
1994(平成 6)年　藤澤北部・高谷天神宮
1995(平成 7)年　江の島の地理と史跡
1997(平成 9)年　茅ヶ崎市文化資料館･平塚市博物館見学（11月）
1998(平成10)年　大磯 吉田邸・大隈邸などを訪ねる（10月）
1999(平成11)年　鵠沼本村地区史跡見学（11月）
2000(平成12)年　辻堂南部の史跡を訪ねて（11月）
2001(平成13)年　江の島道を歩く（11月）
2003(平成15)年　鵠沼松が岡～藤が谷の著名人旧宅を巡る会（4月）
　　東屋の面影をたずねて（7月）
2004(平成16)年　鵠沼西部の文人・文化人居住跡及び史跡めぐり（4月）
　　辻堂茂兵衛資料館訪問（11月）
2005(平成17)年　30周年記念 白樺派ゆかりの我孫子を訪ねる
　　（郷土資料展示室主催　・鵠沼を語る会企画　6月）

展示会

1989(平成元)年　「鵠沼懐古展」を開催（3月）
1994(平成 6)年　「鵠沼のくらし」をJR地下通路で展示
1995(平成 7)年　公民館サークル作品展－昔の遊び　JR地下道（2月）
2002(平成14)年　「華ひらいた鵠沼文化展」を市教委と共催で開催（9月）
2005(平成17)年　30周年記念　鵠沼ゆかりの文化人展
（郷土資料展示室と共催10月－2006年1月）

対外活動

1981(昭和56)年　東久彌宮王子遭難記念碑の移転願い（7月）
1982(昭和57)年　文化財保存を全市に拡げる活動開始（1月）
1987(昭和62)年　「ふるさとまっぷ鵠沼地区」作成に協力（3月）
鵠沼歴史散歩スタンプめぐりに協力（5月）
1989(平成元)年　藤沢市と協力して鵠沼5ケ所（鵠沼・鵠沼海岸・本鵠沼・石上）に案内看板設置（12月）
1993(平成 5)年　鵠南小学校出張授業（11月）
1997(平成 9)年　湘南学園生徒に鵠沼についての話（5月）
1998(平成10)年　渡辺邸保存活動を始める
1999(平成11)年　東屋記念碑設置の要望書を提出（3月）
「鵠っ子スクエア探訪スペシャル」鵠沼南地区史跡めぐりに協力(5月)
2001(平成13)年　東屋跡記念碑除幕式に出席（3月）
2002(平成14)年　J:COM湘南、しおかぜ湘南－文学散歩会員の案内で取材（2月）
松が岡公園にモモの苗木を植樹（鵠沼探求クラブと 3月）
J:COM湘南藤沢局、市広報番組パステルタイム取材協力（4月）
鵠沼中学校文化祭に協力（9月）
秋の鵠沼文学講座と文学散歩」に協力（市観光協会主催10月）
「ふじさわこどもまちづくり会議」に協力（11月）
2003(平成16)年　ＮＨＫ「新日曜美術館」岸田劉生の鵠沼時代再現で協力（10月）
2005(平成17)年　「東屋」海浜口門柱を公民館に移設（8月）
2006(平成18)年　公民館裏庭にシダレザクラを30周年記念として植樹（3月）

会誌『鵠沼』の発行

西暦	和暦	月	日	号	主な記事等
1976	(昭和51)	7	31	第１号	鵠沼海岸の海水浴：伊藤　昌
1976	(昭和51)	10	29	第２号	鵠沼の歴史（２）：伊藤　昌
1977	(昭和52)	2	25	第３号	相模国土甘郷総社皇大神宮：鈴木繁次郎
1977	(昭和52)	3	22	第４号	鵠沼と私
1979	(昭和54)	7	20	第５号	鵠沼と白樺派：伊藤　昌
1979	(昭和54)	9	1	第６号	関東大震災を想起して：奥田直元
1979	(昭和54)	10	23	第７号	鵠沼公民館改築
1979	(昭和54)	12	13	第８号	大震災前後からの鵠沼海岸(一)：高木和男
1980	(昭和55)	1	31	第９号	1980年の会員の声
1980	(昭和55)	6	19	第10号	大震災前後からの鵠沼海岸(三)：高木和男
1981	(昭和56)	1	15	第11号	竜之介氏の憶い出：富士　山
1983	(昭和58)	1	15	第12号	鵠沼の『クグヒ』：伊藤節堂
1983	(昭和58)	3	8	第13号	『鵠沼を語る会』活動年表
1983	(昭和58)	5	10	第14号	『しおかぜ号』履歴書－鵠沼のＳＬ－　伊藤節堂
1983	(昭和58)	7	12	第15号	鵠沼郷土史年表
1983	(昭和58)	9	19	第16号	夜明けのカナカナ：伊藤節堂
1983	(昭和58)	11	8	第17号	写真展『鵠沼の５０年』と私の写真：福地誠一
1983	(昭和58)	12	25	合併号	58年合併
1984	(昭和59)	1	11	第18号	野呂栄太郎さんを語る(一)：逸見千鶴子
1984	(昭和59)	3	13	第19号	野呂栄太郎さんを語る(二)：逸見千鶴子
1984	(昭和59)	5	8	第20号	鵠沼の文人たちとその旧居(その１)：伊藤節堂
1984	(昭和59)	7	10	第21号	瞽女唄『小栗判官照手姫』：伊藤節堂
1984	(昭和59)	9	11	第22号	芥川の鵠沼寓居跡の葉蘭について：葛巻左登子
1984	(昭和59)	11	13	第23号	神楽舎大人『松岡静雄年譜』：伊藤節堂
1985	(昭和60)	1	8	第24号	『鶴』について：富士　山
1985	(昭和60)	3	12	第25号	『鵠沼を語る会』活動年表(その２)：伊藤節堂
1985	(昭和60)	5	14	第26号	岸田劉生・鵠沼の『麗子像』：伊藤節堂
1985	(昭和60)	7	9	第27号	芥川龍之介の『月光の女』について：葛巻左登子
1985	(昭和60)	7	9	第28号	トルストイ「復活の歌」：富士山
1985	(昭和60)	7	11	第29号	青柳通好画伯のこと：田中まさ子

1986(昭和61) 2　　第30号 鵠沼碑文集：伊東節堂
1986(昭和61) 5 13 第31号 市内北部寺社見学会資料
1986(昭和61) 7 8 第32号 堀川の尼寺さん：田中まさ子
1986(昭和61) 9 9 第33号 鵠沼の回顧と鵠沼公民館：吉田興一
1986(昭和61)11 11 第34号 大庭御厨概史：花輪　桂
1987(昭和62) 3 10 第35号 普門寺について：川島弘之
1987(昭和62) 5 12 第36号 茅ヶ崎・辻堂・藤沢地区文化財見学会資料
1987(昭和62) 7 14 第37号 空乗寺について：大橋円明
1987(昭和62) 9 8 第38号 鵠沼皇大神宮御祭神、天照大神：吉田興一
1987(昭和62)11 10 第39号 式内石楯尾神社の由緒：関根正典
1988(昭和63) 1 12 第40号 鵠沼道祖神まつり特集
1988(昭和63) 3 8 第41号 相州鵠沼邑文学(一)内藤千代子：塩沢　務
1988(昭和63) 5 18 第42号 文化財見学のしおり　藤沢東部
1988(昭和63) 7 12 第43号 相州鵠沼邑文学(二)志賀直哉：塩沢　務
1988(昭和63) 9 13 第44号 颯田本眞尼と鵠沼慈教庵：塩沢　務
1988(昭和63)11 8 第45号 相州鵠沼邑文学(三)網野　菊：塩沢　務
1989(平成 1) 1 10 第46号 私のふるさと鵠沼：関根次郎
1989(平成 1) 4 15 第47号 文化財見学のしおり　伊勢原市、日向薬師、宮ヶ瀬
1989(平成 1) 7 25 第48号 鵠沼回顧写真展：吉田興一
1989(平成 1) 7 25 第49号 文化財見学：仁平久秀
1989(平成 1) 9 11 第50号 震災誌特集
1990(平成 2) 1 9 第51号 よかったなあ、あの時代は：今井達夫
1990(平成 2) 3 13 第52号 鵠生園物語：吉田興一
1990(平成 2) 5 8 第53号 南足柄路の文化財をたずねて
1990(平成 2) 7 10 第54号 南足柄路の史跡名勝文化財をたずねて：菊田九郎
1990(平成 2) 9 11 第55号 私の鵠沼：阿部　昭
1990(平成 2)11 13 第56号 鵠沼について：葉山　峻
1991(平成 3) 1 8 第57号 古老に聴く鵠沼の昔日
1991(平成 3) 3 5 第58号 鵠沼の湘南学園について：富士　山＝遺稿
1991(平成 3) 5 14 第59号 三浦半島の文化財をたずねて
1991(平成 3) 7 9 第60号 三浦半島の文化財をたずねて：川島禎一/孝子
1991(平成 3) 9 24 第61号 民俗学者丸山久子先生：田中まさ子
1991(平成 3)11 19 第62号 マラソン青年=新城弘三翁に聞く：遠藤隆二

1992(平成 4) 1 14 第63号 黙って見つめて：田中まさ子
1992(平成 4) 3 10 第64号 鵠沼と芥川龍之介：田中まさ子
1992(平成 4) 9 8 第65号 鵠生園日記(その１～３)：田中まさ子
1993(平成 5) 1 12 第66号 鵠沼の思い出Ⅰ～Ⅱ：若尾　肇
1993(平成 5) 3 9 第67号 鵠沼の思い出Ⅲ～Ⅳ：若尾　肇
1993(平成 5) 7 18 第68号 鵠生園日記(その３続)：田中まさ子
1994(平成 6) 1 11 第69号 鵠沼村のくらし(その１)：有田裕一
1994(平成 6) 3 8 第70号 関根佐一郎氏宅を訪ねて：川島孝子
1995(平成 7) 2 14 第71号 湘南の海と相模湾の大気汚染：吉田興一
1995(平成 7) 5 30 第72号 鵠沼の想出：塚原秋広
1996(平成 8) 7 9 第73号 近代住空間の形成―鵠沼を例とする別荘型住空間
1996(平成 8) 9 17 第74号 鵠沼の古道「蘆花が歩いた道」：高木和男
1996(平成 8)10 1 合本　1～30号合本(ただし28･29号欠落)
1997(平成 9) 9 30 第75号 東屋旅館の歴史をたずねて：編集委員会
1998(平成10) 3 30 第76号 劉生の住んだ別荘―松本陽松園の記録：佐藤和子
1998(平成10) 9 30 第77号 特集　吉田興一さんを悼む
1999(平成11) 3 31 第78号 芥川龍之介の住んだ別荘：有田裕一
1999(平成11) 9 30 第79号 米国から輸入した日本最古の組立家屋：内藤喜嗣
2000(平成12) 3 31 第80号 葛巻左登子さんを偲ぶ：中島舞子他
2000(平成12) 3 31 総目次 別冊特集1～80号総目次(ただし28･29号欠落)
2000(平成12) 9 30 第81号 鵠沼海岸商店街100年の歴史
2001(平成13) 3 31 第82号 「東屋記念碑」設置記念特集号
2001(平成13) 9 30 第83号 鼎談芥川龍之介「蜃気楼」とその舞台：佐江衆一
2002(平成14) 4 9 第84号 川上会長追悼特集号・鵠沼むかし語りⅡ
2002(平成14)10 31 第85号 特集：蓮池
2003(平成15) 3 31 第86号 岸田劉生の住んだ別荘
2003(平成15) 9 30 第87号 田中隆尚・森銑三・菊本別荘・藤ヶ谷高瀬邸
2004(平成16) 3 8 別冊　『今井達夫著作品復刻号』
2004(平成16) 3 31 第88号 菅沼五郎他
2004(平成16) 9 30 第89号 特集：鵠沼と高瀬家の百年
2005(平成17) 3 31 第90号 鵠沼海岸別荘地開發記念碑・万福寺
2005(平成17)11 30 第91号 創立30周年記念特集『語り継ぐ戦中・戦後の記憶』
2006(平成18) 3 31 第92号 創立30周年記念特集　鵠沼を語る会30年の歩み

例会における研究発表・お話

1980(昭和55)10 23	長寿の秘訣	：富士　山
1980(昭和55)10 23	藤が谷「賀来神社」	：伊藤　節堂
1980(昭和55)10 23	鵠沼の石仏石神編年表	：伊藤　節堂
1980(昭和55)10 23	鵠沼の石仏石神編年表資料追加	：奥田　直元
1981(昭和56) 2 19	鵠沼碑文集(改訂版)	：伊藤　節堂
1981(昭和56) 7 17	鵠沼寺院考と砥上が原旅情	：花輪　桂
1981(昭和56)12 17	神明さまの祭り	：伊藤　節堂
1982(昭和57) 7 20	鵠沼の「麗子像」	：伊藤　節堂
1983(昭和58) 1 11	鵠沼「クグヒ」	：伊藤　節堂
1983(昭和58) 1 11	神明さまの祭り(追補)	：伊藤　節堂
1983(昭和58) 3 8	「鵠」について	：富士　山
1983(昭和58) 3 8	江の島の道しるべ考	：伊藤　節堂
1983(昭和58) 5 10	「しおかぜ号」の履歴書	：伊藤　節堂
1983(昭和58) 7 12	芥川龍之介晩年の消息	：富士　山
1983(昭和58) 7 12	鵠沼郷土史年表	：伊藤　節堂
1983(昭和58) 9 13	夜明けのカナカナ	：伊藤　節堂
1983(昭和58) 9 13	幻のくげぬまらんを探して	：塩澤　務
1983(昭和58)11 8	堀一族の越後支配時代	：伊藤　節堂
1984(昭和59) 1 10	鵠沼の民俗行事	：伊藤　節堂・奥田　直元
1984(昭和59) 1 10	野呂栄太郎さんのこと	：逸見千鶴子
1984(昭和59) 1 10	人遊歩規定測量「測点標石」	：久保　尚雄
1984(昭和59) 3 13	龍之介の住んだ二階建の家について	：富士　山
1984(昭和59) 3 13	野呂栄太郎さんのこと(二)	：逸見千鶴子
1984(昭和59) 5 8	桜貝と浜木綿について	：富士　山
1984(昭和59) 5 8	芥川龍之介晩年の消息に補正	：富士　山
1984(昭和59) 5 8	鵠沼の文人たち　その旧居(その１)	：伊藤　節堂
1984(昭和59) 5 8	白樺派の人びと	：伊藤　節堂
1984(昭和59) 7 10	さくら貝訂正と防風に追加	：富士　山
1984(昭和59) 7 10	幻のツキミソウ	：伊藤　節堂
1984(昭和59) 7 10	ごぜ唄「小栗判官照手姫」	：伊藤　節堂

1984(昭和59) 7 10 小栗伝説の文献比較 ：伊藤　節堂
1984(昭和59) 9 11 ハランかスルガランか ：富士　　山
1984(昭和59) 9 11 芥川の鵠沼寓居跡の葉蘭について ：葛巻左登子
1984(昭和59) 9 11 災害（天災）略年表 ：久保　尚雄
1984(昭和59)11 13 第十一番目の「江のしま道しるべ」 ：伊藤　節堂
1984(昭和59)11 13 鵠沼碑文集(その六) ：伊藤　節堂
1984(昭和59)11 13 神楽舎大人「松岡静雄年譜」 ：伊藤　節堂
1984(昭和59)11 13 芥川龍之介晩年の消息補記 ：富士　　山
1984(昭和59)11 13 月光の女 ：富士　　山
1985(昭和60) 1 8 「鶴」について ：富士　　山
1985(昭和60) 1 8 大橋流書法の祖「大橋重慶に関する年表」：伊藤　節堂

※1980年から1985年までの例会における「研究発表」については、「鵠沼」13号および25号に「鵠沼を語る会」活動年表という形でまとめられている。ただし、「他」ということで省略されているものもあるので、バックナンバー各号をあたって、出来る限り補完した。それ以降の例会については記録が見あたらない。
編集後記その他から例会で話されたことが確実なのは次の2件である。

1987(昭和62) 3 ？ 寅さんと長谷川一夫 ：川島　弘之
1988(昭和63) 9 13 颯田本真尼と慈教庵 ：塩沢　　務

※会の活動記録がしっかりした形でまとめられるようになったのは、鈴木編集長が担当するようになった1997年の第75号以降である。

2000(平成12) 4 12 「鵠沼商店街の今昔」の変遷地図と資料 ：榛葉　敏行
2000(平成12)12 19 なぎさクラブについて ：高木千恵子
2001(平成13)11 13 コロネット作戦について ：高木　和男
2001(平成13)12 11 鵠沼の地引き網(ビデオ使用) ：内藤　喜嗣
2002(平成14) 2 12 鵠沼の作家今井達夫 ：青木　　悠
2002(平成14) 3 12 岸田劉生の鵠沼風景について ：伊藤　　聖
2002(平成14) 6 11 私の接した鵠沼の音楽人 ：内田　英一
2002(平成14) 7 7 橋通りの変遷 ：猊倉　　健

2002(平成14)12 10 蓮池について　：渡部　瞭
2003(平成15) 2 11 鵠沼の大給家　：有田　裕一
2003(平成15) 4 8 航空写真から見た藤が谷の高瀬邸　：伊藤　聖
2003(平成15) 5 13 鵠沼の風土と歴史　：渡部　瞭
2003(平成15) 6 10 鵠青会について　：内田　英一
2003(平成15) 8 12 本土初空襲の思い出　：内藤　喜嗣
2003(平成15) 9 9 万福寺の由来/内藤千代子　：浅野　陽子・高野　修＊
2003(平成15)10 14 別荘での暮らし　：菊本　昭一＊
2003(平成15)11 13 ＮＨＫ新日曜美術館「百人の麗子」観賞　※会が取材協力
2003(平成15)11 13 劉生のアトリエのレイアウトと光線の関係：岡田　哲明
2003(平成15)12 9 与謝野晶子の鵠沼の歌　：中山　成彬＊
2004(平成16) 2 10 首塚の碑　：松岡　喬
2004(平成16) 3 10 画家長谷川路可(パワーポイント使用)　：渡部　瞭
2004(平成16) 4 13 彫刻家菅沼五郎　：矢田　健爾
2004(平成16) 5 11 ビデオ「フレスコ画のパイオニア長谷川路可の世界」観賞
2004(平成16) 6 8 鵠沼講中の出羽三山巡礼について　：小林　典夫＊
2004(平成16) 7 13 鵠沼海岸別荘地開発記念碑について　：渡部　瞭
2004(平成16) 8 10 鵠沼皇大神宮の例祭について　：宮崎　誠一＊
2004(平成16) 9 14 昔の鵠沼について　：関根佐一郎＊
2004(平成16)10 12 高瀬弥一と大正教養派　：伊藤　聖
2004(平成16)12 14 昔の天金通りの町並みとエピソード　：大出　サキ＊
2005(平成17) 2 8 石上周辺のうつりかわり　：宮澤　彰
2005(平成17) 3 8 昭和10年前後の鵠沼の想い出　：高木　正夫＊
2005(平成17) 4 12 鵠沼海岸別荘地開発記念碑の登場人物　：内藤・渡部
2005(平成17) 6 14 鵠沼宮之前の祭り囃子と私(篠笛演奏)　：小林　偉利＊
2005(平成17) 7 12 私の八月十五日　：鈴木三男吉
2005(平成17) 8 9 海軍兵学校・海軍時代の想い出　：若尾　肇＊
2005(平成17)11 15 「鵠沼ゆかりの文化人展」内容の説明　：各部門担当者
2005(平成17)12 13 佐分利 信 ～ 芸名の由来　：岡田　哲明
2006(平成18) 2 14 芥川龍之介の短編「悠々荘」は何処？　：有田・佐藤

＊は会員外の方

(さとう　かずこ・たけうち　ひろや・わたなべ　りょう)

「鵠沼を語る会 」創立30周年記念事業

竹内広弥（会員）

平成17（2005）年

6月1日（水）

史跡めぐり「白樺派ゆかりの我孫子を訪ねる」

かつて鵠沼を拠点に活動を続けた白樺派の文士たちが、鵠沼の後に移り住んだ我孫子の文学散歩。鵠沼を語る会企画、鵠沼郷土資料展示室運営委員会主催で行われ両グループから37名が参加。

7月24日（土）

公開講座「鵠沼のあゆみ」

ダイナミックな変化を見せる「鵠沼のあゆみ」を、渡部瞭会員が映像を駆使して分かりやすく解説。62名（一般32名、会員30名）の出席を得て盛会の公開講座となった。講座内容について「興味、若しくはとても興味がある」と答えた方が97％と、的を射たテーマであった。

9月30日

会誌・記念号91号発行

会員（37名）による「語り継ぐ戦中戦後の記憶」を掲載した大特集号。

10月

会誌「鵠沼」の復刻版

1976（昭和51）年に創刊第1号を発行して以来これまでに92号を刊行。「郷土史全般にわたる内容で、郷土史サークル機関紙としては出色のもの」との評価を受け、会員外の愛読者も数多い。創刊号から第30号(昭和51～61年)までは会員の手書きによるもので、会員の苦労の様子が伺われる反面、読者には読みづらい。分かりやすく読んでいただくということで、復刻版を完成させた。

10月15日～1月15日（2006年）

鵠沼ゆかりの文化人展/「鵠沼を語る会」30年のあゆみ

文学・美術・舞台・映像・学術の5分野にわたり総計百数十名の文化人を展

示。旅館『東屋』に逗留し想いを練り執筆し、それぞれの文学世界を創造した近代文学の旗手となった人々も併せて紹介。収集資料には川口松太郎氏が執筆に集中すべく鵠沼に移り住んだ邸宅の見取図、転居挨拶文などと共に、氏の絶筆と言うべき執筆途中の2枚の原稿が含まれている。同時に「鵠沼を語る会」30年のあゆみを展示した。

11月3日（文化の日）

講演会「鵠沼残照」

小山文雄氏を講師に招き、かつて鵠沼を拠点として活動した白樺派と教養派の文人たちについての講演会を開催。出席者は120名強。講演は、松林交響の朗読に始まり、途中休息を入れ2時間に及んだ。

11月中旬～

会のホームページに30周年ページを掲載。

平成18（2006）年

2月25日（土）

公開講座「鵠沼らしさとは何か」

先の「鵠沼のあゆみ」の出席者の多くの方が鵠沼の話に興味を持たれ、さらに深く掘り下げた講座を希望、続編公開講座として開催。参加者56名（一般30名、会員26名）で盛況であった。講師は渡部瞭会員。

3月14日（火）

記念植樹

創立30周年を記念して、公民館庭にしだれ桜（千代枝垂れ）を植樹。併せて記念プレート（木製）を設置。3月の例会終了後、会員数十名が集まり植樹セレモニーを行った。渡辺鵠沼市民センター長/公民館館長も列席。有田会長、渡辺館長により、植樹された「枝垂桜」にお神酒がかけられた。

3月31日

会誌・記念号92号発行

鵠沼を語る会創立 30 周年記念号－その２と題し、鵠沼を語る会 30 年の歩みと 30 周年記念事業のまとめの二部構成。

（たけうち　ひろや＝ 30 周年記念事業実行委員会事務局）

千葉県我孫子市と鵠沼の不思議な縁

渡部　瞭(会員)

はじめに

千葉県我孫子市は、千葉県の北部、手賀沼の北岸に展開する都市で、市内には先土器時代以来の考古遺跡や、平将門伝説も残り、江戸時代には水戸街道と利根水運の結節点として発展した。明治・大正期から静かな水郷の雰囲気が文人たちに愛されたため、「北の鎌倉」を自認している。この地ゆかりの人々を見ると、鎌倉よりもむしろ鵠沼との縁が深く、それが多方面に及ぶことに驚かされる。我孫子市では、これら文人の旧居などを文化財として保存したり、私財を投じて文学館を建設する人がいたりと、大切に扱っている。

一方、手賀沼には多くの水鳥が見られ、昭和59年に山階鳥類研究所が渋谷から移転し、平成２年には隣接地に我孫子市が「鳥の博物館」を開設するなど、自然科学の面でも見るべきところが多い。

①白樺文学館と志賀直哉・武者小路実篤旧居

明治40年10月、志賀直哉・武者小路実篤が鵠沼の東屋旅館に滞在し、この時の話し合いが「白樺派」誕生のきっかけとなった。文芸誌『白樺』は、明治43年４月に創刊、大正３年から５年まで鵠沼(納屋)に住んだ小泉　鐵がその編集にあたった。小泉はその頃藤ヶ谷高瀬邸に住んだ和辻哲郎と一高・帝大の同期。

志賀直哉は鵠沼に住むことはなかったが、明治末年には家族共々東屋に滞在し、小品『鵠沼行』を著している。その後、大正４年９月には我孫子に居住、大正12年３月までをここで過ごした。旧居跡は昭和55年に我孫子市が買収、当時の書斎を復元した。

武者小路実篤も大正３年暮れに東屋で越年、以後佐藤別荘・川元別荘に短期間住んだ。４年９月には鵠沼を離れるが、その後も東屋にはしばしば宿泊し、東屋廃業(昭和14年)後にも無理をいって泊まった記録がある。志賀の勧めで武者小路が我孫子に居を構えたのは大正５年12月。以来「新しき村」を発会し、大正７年には我孫子を去るが、志賀や柳宗悦らとともに白樺派の隆盛期を迎えた。

白樺派を記念し、平成13年１月にＩＴ企業=日本オラクル会長=佐野　力氏が《白樺文学館》を開設した。

②松岡邸

いわゆる「松岡五兄弟」は、兵庫県神崎郡福崎町の漢学者松岡 操の子として、「日本一小さな家」と柳田國男が自嘲的に語る家で生まれ育った。長男=松岡 鼎は、はじめ師範学校に入り、郷里の小学校長となったが後に東京帝大で学び、医師となり千葉県布佐(我孫子市)に住み、父の死を期に母と弟たちを呼び寄せた。

鼎は後に千葉県郡会議員、医師会長、布佐町長等となり、地方自治に大きく貢献した。昭和9年76歳で没。五兄弟とは、長男=鼎の他、三男=井上通泰(みちやす)(眼科医・国史学者・歌人・宮中顧問官・貴族院議員・芸術院会員)、六男=柳田國男(「日本民俗学の父」と呼ばれる民俗学者・詩人、昭和26年文化勲章受賞)、七男=静雄(海軍軍令部参謀・戦史編集委員長・外国駐在武官・大佐・退役後は言語学者)、八男=輝夫(日本画家:松岡映丘、東京美術学校教授)を指す。次男=俊次・四男=芳江・五男=友治は、共に夭折。

布佐は柳田國男にとって青春の町だったし、静雄・輝夫にとっては少年期を過ごした町である。

松岡静雄は、海軍退役後の後半生を鵠沼に「神楽舎(ささらのや)」と名付けた小庵を結び、言語学・民族学の研究に没頭した。鵠沼を語る会の会員、野口ゆくえ氏は二女(野口喜久子氏)の長男(元氏)の嫁、先日他界された松岡喬氏は長男(松岡磐木=法政大学名誉教授)の長男にあたる。また、松岡映丘は画家=長谷川路可(ろか)の生涯にわたる恩師で、鵠沼に住む兄=静雄を訪問した折りなど、東屋の隣にあった路可宅にもしばしば立ち寄っている。

③ 旧村川別荘

村川堅固(1875-1946、東京帝国大学教授・西洋史)は、1918(大正7)年に我孫子に土地を購入し、1921(大正10)年 旧我孫子本陣邸内の離れ屋が取り壊される際に移築した。1925(大正14)年に朝鮮旅行し、その印象の下に設計したユニークな外観の銅版葺き、床は寄木細工による新館を1928(昭和3年)に建てた。大正15年には鵠沼にも土地を購入し、同年に別荘を建てた。二つの別荘は、後に子息の堅太郎(1907-1991、東大教授・西洋史)に受け継がれたが、氏の没後、両別荘とも大蔵省の所管に移り、我孫子別荘は我孫子市の社会教育施設として、鵠沼別荘は氏の遺志により松の緑濃い「鵠沼松が岡公園」として生まれ変わった。

④ その他

我孫子に住んだ記録のある鵠沼ゆかりの人物には、他に小説家=中 勘助、画家=硲(はざま) 伊之助がある。　　(わたなべ　りょう)

史跡めぐり

白樺派ゆかりの我孫子を訪ねる

岡田哲明（会員）

鵠沼を語る会創立30周年記念事業のひとつとして企画された「史跡めぐり」は鵠沼郷土資料展示室が主催、当会が共催、「平成17年度視察研修会」というかたちで藤沢市のバスをチャーターすることができ千葉県我孫子市手賀沼に散在する主として白樺派ゆかりの史跡、施設などの見学にいきました。

平成17（2005）年６月１日（水）午前８時20分藤沢市役所まえに集合。市民センター1名、展示室運営委員協力員17名、当会会員19名、合計37名の参加者を乗せて８時30分バスは予定通り我孫子に向かって出発しました。雨天決行でしたが当日は雲ひとつない快晴に恵まれ、和気藹々の車中では渡部会員の「千葉県我孫子市と鵠沼の不思議な縁」というレクチャーを受けて参加者一同、予備知識を得たところでバスは手賀沼に架かる手賀大橋を渡り、鳥の博物館駐車場に到着しました。丁度そこへ頼んでおいたお弁当が地元の鈴木屋食堂さんから届けられ、三々五々親水広場に陣取って少し早めのお昼をいただき、鳥の博物館に入館しました。近くには黒田家に嫁がれた紀宮さまが研究員として通われた山階鳥類研究所がありますが、この博物館は研究所の施設ではなく、我孫子市立でした。

2004年12月末、我孫子市の利根川沿いに広がる水田地帯にコウノトリが飛来し３ヶ月滞在したので「コウノトリの企画展」が催されていました。

次に向かったのは村川別荘です。親子で西洋史学者であった村川堅固、堅太郎の別荘で、堅太郎の令嬢、夏子さんが東京から駆けつけて来られていてご説明をいただきました。夏子さんは鵠沼の村川別荘跡地を松が岡公園として残すのに尽力、奔走されたので我々とは顔なじみの方です。

村川堅固は大正時代、我孫子本陣が壊されると知ってその一部を買い取りここに移築したもので、昭和になってから朝鮮風の反り屋根をもった別棟が建てられました。邸内には白樺派の人々と親交のあった英国人陶芸家バーナード・リーチが作った木製の三角椅子が二脚あり、たいへん珍しいものでした。

子の神大黒天の境内を通って神社の石段を降りて西に歩き続けると、右手の小

高い所が志賀直哉邸跡です。パネルが数枚立てられ、建物の配置や間取り、写真などで当時のありさまが紹介されていましたが、干上がった池の石組みが少し残っているのが微かに面影を想像させるにとどまりました。

志賀邸から道の反対側、少し行くと白樺文学館があります。ここはメセナでIT企業の日本ミラクル佐野力会長が平成13年１月にオープンした施設で、佐野氏は館長も務めておられます。

１階の資料室には雑誌『白樺』の原本、復刻版の収蔵のほか関係図書が開架で読めるようになっています。２階が展示室で写真や志賀直哉の暗夜行路の原稿、小林多喜二あての手紙、武者小路実篤の画賛つきの野菜の絵や柳宗悦の民芸運動に加わったバーナード・リーチ、浜田庄司、河井寛次郎、芹沢圭介らの作品などが展示されています。地下１階が音楽室になっていて、東京音楽学校声楽科出身の歌手であった柳宗悦夫人、（旧姓、中島）兼子のCDを聴くことが出来ます。

文学館を出て少しいくと右手に登り坂があります。そこを上りきった所が柳宗悦の住んだ三樹荘跡です。いまは別の方が住んでいて入る事は出来ません。このすぐ傍に講道館柔道の嘉納治五郎邸もあります。宗悦の母は嘉納家の出であり、宗悦は治五郎の甥にあたります。

生涯学習センターアビスタのある手賀沼公園の駐車場に先回りして待機していたバスに乗って手賀沼ふれあいラインを２キロほど走り、武者小路実篤邸を目指します。実篤邸はバスの入れない細い道を往復１キロほど歩かねばならず、バスの待機場所に困りましたが運転手さんの機転におまかせして歩き始めました。

郷土資料展示室運営委員長の中島知子さんが下見をして置いてくださったおかげで、案内標識もない田舎道をたどって武者小路実篤邸に到着しました。

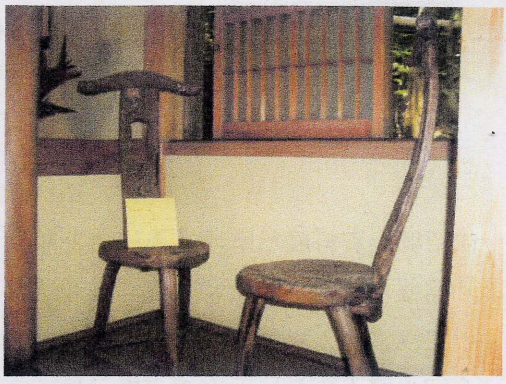
立派な門の脇にプレートがあり、概要が紹介されています。ここは今、某企業の所有物らしいのですが、建物も庭園もきちっと管理されていて塵一つ落ちていません。文化財の保護運営はこうでなければなりません。とてもよい例を見た思いでした。

帰りのバスは、収穫の多い見学内容に満足したのとハイキング並の歩行距離のほど良い疲れとでお眠みになった方が殆どでしたが、故障者も事故もトラブルもなく無事に藤沢に帰ってこられたのがなによりでした。おわりに各役割分担をしてくださった方々に御礼を申し上げます。　　（おかだてつあき）

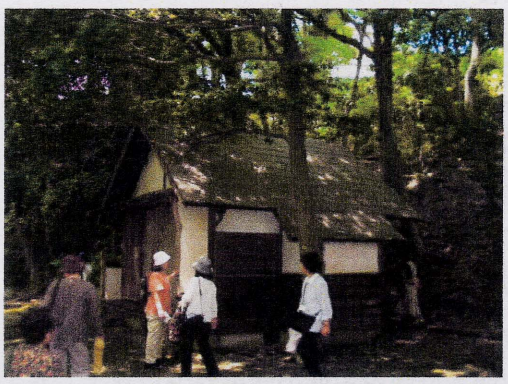
※松岡邸のある布佐は我孫子市の東端にあり、遠いので残念ながら割愛した。

我孫子見学アルバム

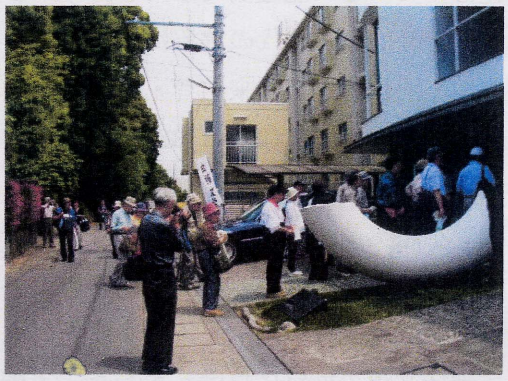
村川夏子さんの説明を受ける



村川別荘　バーナード・リーチ作の椅子



志賀直哉の書斎(復元)



白樺文学館を訪れる

座敷内の様子

武者小路実篤邸　門前の説明版

鵠沼を語る会30周年記念事業

鵠沼ゆかりの文化人展

浅野陽子(会員)

鵠沼郷土資料展示室運営委員会と鵠沼を語る会の共催で2005年10月15日より開催された「鵠沼ゆかりの文化人展」は、2006年1月15目に展示室はじまって以来の入場者（1962人）を得て成功裏に終えることができました。

今回の郷土資料展示室での展示は、文学・美術・舞台・映像・学術の5分野で鵠沼にゆかりの文化人117名を取り上げました。このうち舞台・映像を展示室運営委員、その他を鵠沼を語る会で担当しました。

たとえば大正時代の鵠沼に焦点をあてると、明治35年の江ノ電開通以来、保養地・別荘地として来訪者・滞在者が増えてきたなかに、数多くの文化人が含まれ、なかでも20代から30代の若い世代が多く、その中から今回の展示では、集団で活動した文化人の群れにスポットライトを当てて紹介しました。文学では武者小路実篤、小泉鐵らの白樺派、美術では岸田劉生を中心とする草土社、そして学術では安倍能成、和辻哲郎らの大正教養派と呼ばれる青年集団です。

また敗戦直後の鵠沼を省みますと、未曾有の混乱の時代に鵠沼文化人は連帯して地域文化の構築に貢献しました。美術部門では藤沢市展の開催などに尽力した美術家集団、文学部門では鵠沼に腰を据えて活動した安藤寛・今井達夫・川口松太郎らがいます。今回、ご遺族のご協力で多彩な展示ができました。

また舞台の上から、舞台の陰から鵠沼の文化を高めた人々がいました。この人々の活動が現在に受け継がれ、市民オペラとして結実しています。映像では、若くして亡くなってしまった赤木圭一郎、中村錦之助等のスターが取り上げられました。同世代のファンが懐かしがって多数来場されました。

これらの収集資料には会員、展示室運営委員以外の多くの来場者の協力で貴重な資料を発掘展示することも出来ました。

なお、詳しい内容については、別冊「鵠沼」で、「鵠沼ゆかりの文化人」特集号として紹介されることになりましたので、ご期待ください。

（あさの　ようこ）

鵠沼ゆかりの文化人展アルバム

鵠沼を語る会30年の歩みを展示

岡田会員による美術部門の解説

連日多くの見学者が訪れた

文学部門の目玉、川口松太郎の遺品

鵠沼から生まれた藤沢市民オペラ

永遠のトニー=赤木圭一郎

公開講座　鵠沼学入門

渡部　　瞭（会員）

今年度の公開講座は、会の創立30周年記念事業として、夏冬2度にわたって開催した。鵠沼という地域を社会科学的にとらえるという視点から、「鵠沼学入門」と題し、第1回は歴史学的視点から「鵠沼のあゆみ」という副題、第2回は地理学的視点から「鵠沼らしさとは何か」という副題をつけた。かなり固い内容なので、プレゼンテーションソフトによる画像提示で変化を与えた。

Ⅰ　鵠沼のあゆみ　　2005年7月24日（土）

湘南砂丘地帯の形成史、海退により形成された砥上ヶ原と古鵠沼湖

奈良平安期の石楯尾神社・皇大神宮創立の土甘郷時代

平安末の大庭御廚開発による鵠沼郷形成

鎌倉室町期には寺院も建ち往来する人々が増えたが、寂しい砥上ヶ原は残る

大庭城の落城によって後北條支配下の鵠沼村となり、江戸時代における支配者布施家・大橋家と藤沢宿の助郷村、鉄炮場の設置、新田開発などが行われた

明治維新以降の鵠沼地区の変貌における3つのエポックを指摘した。

①鉄道開通→伊東将行らの3000坪単位の別荘地・海水浴場開発と山車の時代
　　→松の色濃い保養地鵠沼に華咲いた大正鵠沼文化

②関東大震災→高瀬弥一の300坪単位の高級住宅地開発と諸・桃の時代
　　→昭和初期に相次いだ大型公共投資＝インフラの整備

③高度経済成長→30坪単位の一般住宅地化と農業解体の時代

Ⅱ　鵠沼らしさとは何か　2006年2月25日（土）

地理学的観点から、鵠沼の置かれた環境と相対位置を中心に考察した。

自然環境（海岸砂丘地帯）・社会環境（中心との距離）

：都から僻遠の東国→中心から1日圏→中心から1時間圏（首都圏の一画）

松・風・砂・浜に象徴される海岸リゾートと大正文化の発信地

「本村」と「海の手」の二面性について。先進性と後進性について。

湘南の中心地＝ビーチスポーツの発信地および鵠沼の持つ問題点など

（わたなべ　りょう）

特別講演会　　2005.11.3　鵠沼公民館ホール

「鵠沼残照」～白樺派と教養派～

講　師　　小山文雄氏

まずは鵠沼を語る会30周年おめでとうございます。
さて　今日のテーマですが、今回は鵠沼で活躍をした大正教養派と呼ばれる人たち、特に和辻哲郎を中心にしますが、それから武者小路実篤を中心とした白樺派、これが非常に鵠沼と縁が深いのでありまして、簡単に言いますと要するに近代は鵠沼から始まったと言っても良い位なのであります。

今日は事実関係の話はやや控えめにいたします。というのは鵠沼を語る会の機関誌である『鵠沼』とか私が書いた『個性きらめく（正続）』にかなり丁寧に述べておりますので詳しくお知りになりたい方はそちらを読んで頂きたいと思うからであります。

それで今日は事実よりは意味に傾けた話にしたいと思っております。
ただ、やっぱり思想と文学ですけれども、どちらかと言うと文学ですから、そこでプロローグとして用意いたしましたのが皆さんのお手元に差し上げてある刷り物「構成 松林交響～五つの作品による～」であります。これは要するに五人の作家の作品のなかから鵠沼から二宮に至る海岸の松林がテーマになっている部分を抜き出して繋げた、まあひとつの組曲のようなものであります。まずこれで鵠沼をイメージして頂き、それから話に入っていきたいと思います。

ちょっと、お読みします。

「松林交響～五つの作品による～」

松、海辺の松林。江ノ島からゆるやかな弧を描いて西に延びる浜に、深い緑の影が落ち、木漏れ日がたわむれる。詩人高橋元吉の、古希をすぎてなお瑞々しい感性は、ごつごつしながらしなやかな松を謳う。

松の木の多いところだ
どの窓をあけても松の木の梢が見える
夕方の空のひかりを少し波立たせながら
梢の葉の繁みが揺れてゐたりする

＊

松の梢が空に揺れてゐたって
誰も驚きはしない
おれも別段　驚いてはゐない
ただ見とれてゐるだけだ

海風が松の根方に砂を吹き寄せ、その砂山にまた根を張り、くりかえす生の営みが、五月の風に花粉を舞わす。詩人日夏耿之介（ひなつこうのすけ）は、療養の日に、そのさわやかな風を書きとめる。

ある日、開け放った初夏の座敷に横になってゐると、全く予期しない、心持ちのよい風がスクスク流れ込んで来て、それにつれて裏山の小松林の松の花の黄色い粉がさっと舞ひ込んできて、そのとたん強いオゾオンの香をさも偲ばせる松の花特有のすがすがしい薫香がプウンと鼻を打って、丸でからだ中、松の香にふんわり包まれてしまったやうで何ともいへず朗らかになり、さしも頭のなかに鉛の分銅を垂れてゐたやうな頑固な病情が、一旦に消え去ったやうな気がしばしした。

浜に出て、砂に身を横たえれば、空が光り、波が光り、やがて、歌人窪田空穂（くぼたうつぼ）はまどろみに誘われる。

海辺の松林

敷く莫蓙をとほしてわが背にしみて来る
松の木陰の夏の砂の冷え

＊

砂に寝て見やれば怪し老松の
立ち続きたる太き幹立（もとだち）

＊

砂の上に目瞑りをればかすかなる
声耳につく松の小鳥か

＊

目覚むればわが目の上に松青く
葉がひに高く照り光る空

＊

砂渡る細き風あり目につづく
草の葉ゆすり我が眉に来る

松の中に目覚め、松の中にすごし、松の中にまた眠る。そうした時を「しづかな流れ」と形作る中勘助(なかかんすけ)は、松林にたちこめるそこはかとない色彩をしみじみと眺める。

朝おきてみると松の林のなかに明けはなされた紺黒の夜の残香ともいふべき藍色の靄がほうつとたなびいてゐる。そこには恋にむれる春の霞の温みはなくて、すがやかな思慕ともいふべき柔みがある。さうしてそのなかにつつまれたすべてのものの感じを和げて、軽く、弱く、淡々しくしてゐる。たちならんだ松の幹の近いものは幻のやうに、はなれたものは幻の幻に、遠いものは幻の影になってゆく。眠り足りて爽かな眼に恍惚として眺めつくしてゐる心地をたとへんものもない。これはこの頃の晴れつづくつめたい朝のこよない楽みである。夕方になって枯れた浅茅のなかの餌をひろふ河原鶸(かわらひわ)もねぐらに帰るころになると、暮れてゆく山のかなたに沈む太陽の最後の光が繁りあった松の葉のすきまをもれて、下枝や幹のかたつらをかつかつにところどころに赤みのかった橙色に染める。それはもう、生気も光輝もないすさまじいものであるが、それさへみるみる色があせて、あとに空しい黄昏をのこして消えてしまふ。私はそれをまたしみじみと眺めつくすのである。

若い哲学者、和辻哲郎もまた松林に住み、美しい赤褐色の幹と浅緑色の葉に、かぎりない親しみをおぼえていた。

雨がふると幹の色はしっとりと落ちついた潤いのある鮮やかさを見せる。緑の葉は涙にぬれたようなしおらしい色艶を増して来る。雨のあとで太陽が輝き出すと早朝のような爽やかな気分が、樹の色や光の内に漂うて、いかにも朗らかな生の喜びがそこに躍っているように感ぜられる。おりふしかわいい小鳥の群れが活き活きした声でさえずり交わして、緑の葉の間を楽しそうに往き来する。――それが私の親しい松の樹であった。

ある日、和辻は小高い砂山を崩している場所にたたずんで、松の根っこの複雑な相を見守った。

地下の根は、戦い、もがき、苦しみ、精いっぱいの努力をつくしたように、枝から枝と分かれて、乱れた女の髪のごとく、地上の枝幹の総量よりも多いと思われる太い根、細い根の無数をもって、一斉に大地に抱きついている。

それは驚異であった。そして和辻は思う。

古来の偉人には雄大な根の営みがあった。そのゆえに彼等の仕事は、味わえば味わうほど深い味を示してくる。

天を突こうとするような大きな願望は、いじけた根からは生まれるはずがない。

偉大なものに対する崇敬は、また偉大なる根に対する崇敬であることを考えてみなければならぬ。

教養は培養である。それが有効であるためには、まず生活の大地に食い入ろうとする根がなくてはならぬ。

もう一度、高橋元吉の詩にもどって終ろう。

なにか感じたり　味わったり
考へたりする　アタマといふもの
さういふことの好きな　アタマといふもの

「松林交響」は以上です。

今、鵠沼の松林が少なくなって、たいへん残念ですがイメージの上では鵠沼の松林というのは非常に大きな意味を持っています。これは今回取り上げなかったけれども一番凄絶な姿でいえば芥川龍之介の『鵠沼雑記』のなかに…松林の中を歩いていると犬がふりむいてニヤリと笑った…というくだりがあります。

ここから、まずは大正教養派と呼ばれる人々のお話をしようと思います。大正教養派というのは勿論後の人が、そう名付けたのであって、当時、大正教養派と言ったわけではありません。ただし、教養主義とか教養派というのは明治にはないのです。明治には修養するというのはあった。明治の人は修養を心がけた。修養はトレーニングであり実際に身体を動かして鍛えるということであります。

それが大正時代に入って文明開化でヨーロッパからはいってきたものが、だんだん咀嚼されてくると、違った様相が現れてくる。それがいわゆる教養です。

教養は英語で言うとカルチャーです。カルチャーとは耕すということ、トレーニングではなく自分の心を耕すところに教養の持つ大きな意味が出てきたのであります。教養の底には哲学がある。哲学というのも新しい言葉で明治以後、西洋から哲学が入ってくる。当時の哲学の翻訳書を読んですらすら分かるものはまずありません。大体、訳している人が分かっているのかなと首を傾げたくなるような訳し方です（笑）。それが大正時代に身近なものになってくるのであります。

安倍能成という哲学者、この人も鵠沼に住んだ大正教養派の一人ですが、この人が書いた『西洋古代中世哲学史』岩波で大正時代に出した哲学叢書です。私が今日持ってきたのは第四版ですが初版は大正 5 年 6 月 15 日。再版、三版、四版

がいずれも大正 5 年 6 月 18 日です。今は一版 3000 部ほどでしょうが当時はそれほどでないにしても、いかに哲学思想に興味を持つ若い人を惹きつけたかが分かります。そこには教養というひとつの方向があったからといえます。この本には「哲学叢書刊行に際して」と題して岩波茂雄が書いていますがそこにもこの風潮がよみとれます。

鵠沼の大正教養派としては和辻さんを挙げねばなりません。和辻哲郎を鵠沼と結びつけたのは高瀬弥一です。高瀬家については鵠沼を語る会の会誌『鵠沼』に詳しい研究発表があるので省略しますが、和辻は高瀬家の長女照(てる)と結婚する。そしてしばらく高瀬邸内に住みいくつかの本を書きます。岩波から出版した『偶像再興』というエッセイは大正 7 年 12 月に刊行されましたが、これは鵠沼で書かれたものです。

この初版には「鵠沼の松林と砂丘とのあいだに送りし様々な日の想い出にこの書を阿部次郎、安倍能成両君に献ず」という献辞があります。この 1 ページだけでも鵠沼と大正教養派が浮かび上がってくるのです。ただ、二版以降この献辞は削除されました。それは和辻と阿部次郎とのあいだに、或る確執があってのことと私は思っています。

和辻は高瀬三郎の長男弥一と一高、東大を通じての友人で卒論を書くため鵠沼の高瀬邸に寄寓する。と言っても建物の一間を借りるというのではなく、邸園の一隅といっても敷地 4 万坪とも人によっては 6 万坪ともいうすごい敷地の松林のなかに散在する建物の一棟です。それで卒論を書き終えると弥一の妹の照さんにプロポーズするわけで鵠沼との縁を深めるのです。この辺りのことは『個性きらめく』に書いておきました。その後、和辻夫妻は品川のとなり大森に住みます。一方、阿部次郎は大井町に住んでいましたので二人はしばしば往来しました。和辻は 5 年先輩である阿部に尊敬と親しみをもっていたから照夫人もそれなりに好意をもって付き合っていたのです。その縁があったので阿部も大正 3 年から一時期、鵠沼に来て高瀬邸内に住む訳です。鵠沼の阿部から大森の和辻に宛てた手紙があります。

途中すこし抜きながら読んでみます。

「あなたがたお二人は特別な意味で僕のもっともよい友達です。僕には遊び友達やひととおりの好意を持ち合っている友人や僕を畏敬してくれる既見、未見の友達などは相応にいます。けれども僕が真剣になって自分の問題に突き当たっている時に、とくに僕が自分の卑しさについて苦しんでいる時に、

なお友達らしい心持で思い起こすことの出来る人は極めて少数です。一見、僕の周囲は君よりもかなり賑やかそうですけれど、奥底にいけば僕は随分孤独です。外面の賑やかなのが特に孤独の感じを強めてさえいます。そうして僕も本当に友達が欲しいと思います。あなたがたを現在のままで僕が求めている本当の友達に当たるというのは嘘ですからそうはいえませんが、僕が孤独の中にいて友達らしく懐かしいと思う事が出来る五六の人のなかで特に親しみを感ずる一対の人だということは言い得られると思います。僕は特別に孤独に耐えうる性質のようですし、孤独を悲しみながら一面には求めて孤独に付こうとするような性質があるようですから、僕と親しくなろうとする友達にはいつも物足りない思いをさせるような気がします。」

以下、略しますが、当時、阿部が和辻夫妻に深い友情を持っていたことはよく分かります。だから今度は逆に、阿部が東京に、和辻が鵠沼に住むようになると、なにかと言っては和辻の所に来ていたのです。

大正教養派というのは孤独がいちばん中心のテーマだったのです。私は大正のこの時代にはまだ生まれていませんでしたが、大正から昭和へ、流れとしては大正教養派なんです。ですから青年の頃、この時代の書物を読んで影響を受けました。だから私も孤独なんです（笑）。孤独はテーマなのです。孤独について考えてないと生きている気がしない、そういうのが大正教養派の姿だと言って良いでしょう。

大正 4 年 6 月に和辻は鵠沼に住みます。大正 5 年 3 月には阿部次郎が鵠沼に来ます。やがて安倍能成も来るようになってそこに哲学っぽい集まり「例の会」という分かったような分からないような会が出来るのです。この分かったような分からないようなというのが哲学やる人は得意なんです。

その 3 月 20 日の日記に阿部次郎は次のように書いています。

「明日、鵠沼へ遊びに行くつもりなりしが明夜つね（阿部次郎夫人）帰宅すべしというに急に今夜、鵠沼に行くこととする。6 時 25 分、新橋発の汽車の中にて月の出を見る。鵠沼に着きたるに和辻は本館に行き居りて照さんのみあり。照さんの恨み言。ここにも黙々の間に一種の Verstand（理解）あるを感ずる。10 時和辻帰る。三人で月夜の松原を回ったりして 12 時近く就寝。眠りならず。」

翌日、3 月 21 日

「朝早く覚む。されど寝不足の感ありて頭はっきりせず。午前、夫婦と京

ちゃん（和辻の長女）と 4 人にて七里ガ浜へ、食後 1 時間ばかり昼寝したら元気になりあと 3 時間ばかり清々と話す。蓄音機をやる。新内の『明烏』に皆、涙にむせぶ。」

これを見ても二人の友情はよく分かります。

蓄音機をやる。この当時、蓄音機がある家なんてのは大変なものでした。

新内はもとは浄瑠璃です。よくお芝居などで新内流しという門付けしてお鳥目を頂くというあれです。明烏というのは『明烏夢の泡雪』という悲恋もので、行き着く先は心中です。

今日は皆さんに泣いて貰おうと思って明烏のテープを持ってきたのでお聴かせします。　*（テープ再生準備間に合わず）* え？出来ない？それは残念。せっかく泣いて貰おうと思ったのに…（笑）。では先に進みましょう。

いわば西洋をじかに身に受けている和辻や阿部が泣き節といわれる新内に涙するというのは日本なんです。いつの時代でもどこかに日本回帰がある。つまり何時も折衷の中にいるといえるのです。

阿部次郎は夏目漱石の弟子です。『三太郎の日記』を書きました。私なんか夢中で読みましたが皆さん方の中でも男の人は読んだ方が多いと思います。阿部次郎はちょっと角のある人で、三太郎というのは昔商家の丁稚や小僧などを馬鹿にする言葉なのです。ですから漱石は三太郎という言い方を好まないと言いました。

和辻、阿部、安倍、中、かれらは皆仲間だったのです。そして皆、漱石とつながりを持っています。「あべ」が二人居ましょう、これを区別するのに安倍能成を（按配よくなる）と読んだ。これは縁起かつぎで漱石は途中から病気、病気が続いたから按配よくなるさんが来るのを喜んだといいます。

安倍能成も鵠沼に居ました。それから冒頭に紹介した中勘助は平塚に居ましたからひんぱんに安倍能成を訪ねて来るのです。中は『銀の匙』を書いた人です。

この『銀の匙』は漱石に褒められた本です。

中勘助はたいへん好男子でしたから、安倍が留守だったりして安倍夫人と連れ立って鵠沼の松林を散歩したりすると、すぐに噂が立ったりもしました。

大正昭和にかけて私等の世代は哲学、思想に関心を持ったものです。和辻哲郎の『偶像再興』、阿部次郎の『三太郎の日記』は必読のバイブルでありました。これを読んでいない奴は人間じゃないと言われたくらいです。それから出隆（いでたかし）の『哲学以前』もよく読まれました。さらにそのあと、林達夫、和辻から 10 年ほど後の人ですが鵠沼に住んでいました。その他私の好きな人が鵠沼

にはたくさん居ます。長谷川巳之吉、この人も好きです。第一書房という出版社を作った人で「鵠沼海岸だより」など随想はどれも良い文章です。

いま言った人々は、基本的には「自由主義の洗礼を受けてきた人たち」であり鵠沼は自由主義を育てた所ともいえるのです。いまでこそ、わざわざ自由主義などと言わなくても、自由で自由でしょうがない位ですが、当時の自由主義とは一種の覚悟をもって身につけたものであります。自由主義者として非難され裁判に掛けられた河合栄治郎の『学生生活』『第二学生生活』は学生たちの評判の書物となりました。河合も藤沢、鵠沼にきたことがあります。

鵠沼には自由主義の風が吹いていたともいえるのであります。

— 休　憩（休憩中にテープ再生可能となる）　—

新内「明烏」演奏のテープ（さわりの部分のみ）をかける。

きのふの花は、けふのゆめ。
いまはわが身につまされて、義理といふ字はぜひもなや。
つとめする身のままならず、わかれとなれば今更に、
往なせともなき、はなれぎは。このかなしみに引きかへて、
あの二階の三味線は、
いつぞやぬしの居つづけに、
ねまきのままに引き寄せて、たがいにかたる
楽しみの。それにひきかへ今頃は、
どこにどうして居さんすやら。
とにかく添はれぬ、ふたりが身の上。
ハァあじきなき浮世じゃナァ。
たとへこの身はあわ雪と、
ともに消ゆるもいとわぬが、
この世の名残りにいまいちど、
あひたい見たいとしゃくりあげ、
狂気のごとく心もみだれ、
なみだの雨に雪とけて、
前後正体なかりけり。

はい、有難うございました。

にはたくさん居ます。長谷川巳之吉、この人も好きです。第一書房という出版社を作った人で「鵠沼海岸だより」など随想はどれも良い文章です。

いま言った人々は、基本的には「自由主義の洗礼を受けてきた人たち」であり鵠沼は自由主義を育てた所ともいえるのです。いまでこそ、わざわざ自由主義などと言わなくても、自由で自由でしょうがない位ですが、当時の自由主義とは一種の覚悟をもって身につけたものであります。自由主義者として非難され裁判に掛けられた河合栄治郎の『学生生活』『第二学生生活』は学生たちの評判の書物となりました。河合も藤沢、鵠沼にきたことがあります。

鵠沼には自由主義の風が吹いていたともいえるのであります。

— 休　憩（休憩中にテープ再生可能となる）　—

新内「明烏」演奏のテープ（さわりの部分のみ）をかける。

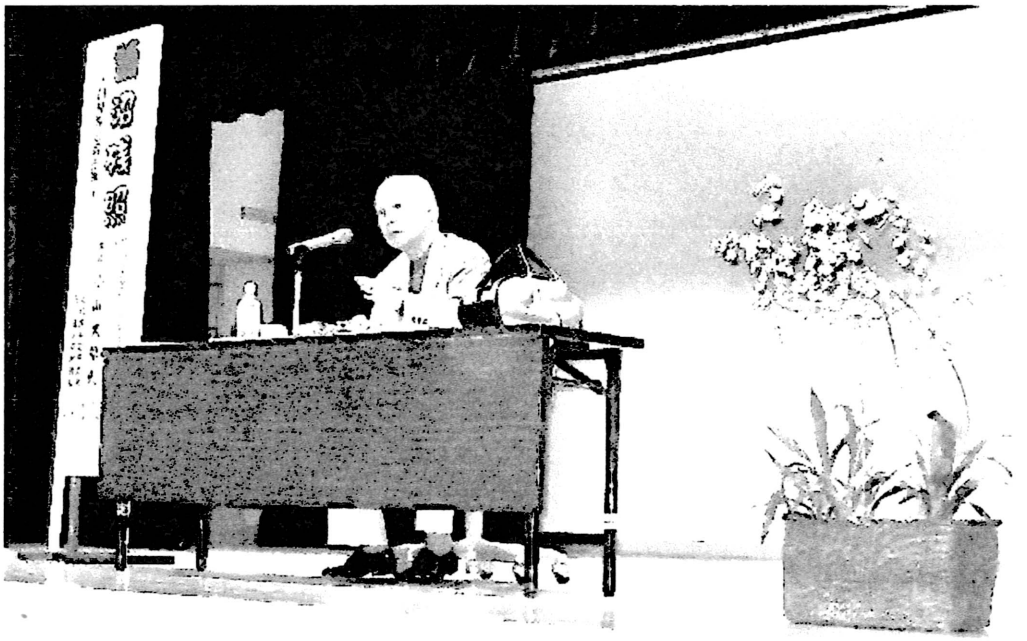
きのふの花は、けふのゆめ。
いまはわが身につまされて、義理といふ字はぜひもなや。
つとめする身のままならず、わかれとなれば今更に、
往なせともなき、はなれぎは。このかなしみに引きかへて、
あの二階の三味線は、
いつぞやぬしの居つづけに、
ねまきのままに引き寄せて、たがいにかたる
楽しみの。それにひきかへ今頃は、
どこにどうして居さんすやら。
とにかく添はれぬ、ふたりが身の上。
ハァあじきなき浮世じゃナァ。
たとへこの身はあわ雪と、
ともに消ゆるもいとわぬが、
この世の名残りにいまいちど、
あひたい見たいとしゃくりあげ、
狂気のごとく心もみだれ、
なみだの雨に雪とけて、
前後正体なかりけり。

はい、有難うございました。

こんなもの読めば 3 分で読めてしまいます。素読みするのだったら。このリズムがひとつの空気を作るわけです。リズムがその空気に合うか合わないか、それで好き嫌いが出るわけなのです。今日はまだ比較的年配の方が多いから、気持ち悪くなった人はいないと思うのです。ということはつまりどういうことかと言うと、大正をまだ身の中に残しているということであるわけです。

和辻にしても、阿部次郎にしても、これから白樺派の話をしますけれども、白樺派の武者小路にしても、非常に自分と身近な部分があるのです。勿論、聞いていて、私は音楽はだめなのですけれども、やっぱり涙は流れないけれども、どこか胸の中に何かが流れていくという気持ちがします。

さて、今度は白樺派に行きましょう。『白樺』は明治 43 年 4 月に創刊されました。この中心は言うまでもなく志賀直哉と武者小路実篤ということになるわけです。



当時の言い方をすれば、銀のスプーンしか手にしたことがない男たちということです。それぞれの家柄を持っている人が多かったわけです。志賀と武者小路といいますと、志賀のほうが年が上なのです。武者小路というとすごい年上と思われますが、志賀は明治 16 年の生まれ、武者小路は 18 年ですから 2 つ歳が志賀のほうが上なのです。

面白いことに二人はともに長生きしました。志賀が亡くなったのが 88 歳米寿

こんなもの読めば 3 分で読めてしまいます。素読みするのだったら。このリズムがひとつの空気を作るわけです。リズムがその空気に合うか合わないか、それで好き嫌いが出るわけなのです。今日はまだ比較的年配の方が多いから、気持ち悪くなった人はいないと思うのです。ということはつまりどういうことかと言うと、大正をまだ身の中に残しているということであるわけです。

和辻にしても、阿部次郎にしても、これから白樺派の話をしますけれども、白樺派の武者小路にしても、非常に自分と身近な部分があるのです。勿論、聞いていて、私は音楽はだめなのですけれども、やっぱり涙は流れないけれども、どこか胸の中に何かが流れていくという気持ちがします。

さて、今度は白樺派に行きましょう。『白樺』は明治 43 年 4 月に創刊されました。この中心は言うまでもなく志賀直哉と武者小路実篤ということになるわけです。

当時の言い方をすれば、銀のスプーンしか手にしたことがない男たちということです。それぞれの家柄を持っている人が多かったわけです。志賀と武者小路といいますと、志賀のほうが年が上なのです。武者小路というとすごい年上と思われますが、志賀は明治 16 年の生まれ、武者小路は 18 年ですから 2 つ歳が志賀のほうが上なのです。

面白いことに二人はともに長生きしました。志賀が亡くなったのが 88 歳米寿

です。武者小路は91歳です。

さて、志賀と武者小路がいかに仲が良かったかと言いますと、武者小路のずっと老年になったときの詩があるのです。60歳を過ぎてから作った詩があります。志賀のことはよく詩にしておりますけれども、これもそのひとつです。めったにお聞きになれないでしょうから…　こんな詩です。

志賀と僕

志賀直哉と二人
向かいあって
腰かけに腰かけて話している
ふと自分は昔のことを思い出した
四十年前に
自分達がまだ若かった時
こうして話していたことがあった
当時は二人とも若かった
希望に燃えて
文学の話をしたり
画の話をしたり
未来の希望の話をした。
当時二人はまだ学生だった
恋の話もした

今二人は六十以上の老人である
だが二人は昔と少しもちがわないつもりで
話をしている
しかし二人の肉体は
もうすっかり二人の老人であることを
語っている
夢のように四十年の月日はたってしまった
二人は今子供もあり孫もある
二人は齢を忘れて元気に
いろいろのことを話している
だが過ぎ去った四十年

その間に二人は何をしたか
何を見、何を経験したか

二人がこうさし向かいでいる間に
四十年が経過して
二人の顔がその間に段々変って来たことを
映画にでもとってうつしたらどんな気がするだろう
自分はふとそんなことを考えた
志賀とこの四十年の間
何度さし向かいに腰かけて話しあったことか
二人の友情は昔も今も変わらないが
いつの間にか二人の青年が
二人の老人になっていた
年の仕業(しわざ)を自分は感じて
今更に志賀の顔をみた

なかなか良い詩ですね。年輪の出た詩ですね。ふたりにだけ焦点をあてました。

鵠沼では小泉鐵(こいずみまがね)という大よそ和辻と同じくらいの歳の人ですが、この人は一時期、責任者として『白樺』の編集をやっていたのです。小泉鐵が鵠沼に来たので鵠沼が『白樺』の編集所になっていた時期がありましてね、『白樺』と鵠沼とは切っても切れない縁があるわけです。志賀と武者小路が連立って来たのが明治40年の秋です。ご存知と思いますけど、志賀直哉のほうに今で言うと何と言ったら良いのでしょう、女中さんなんだけど、当時でいえばお手伝いさんというのか小間使いというのか、それと関係ができたということで、志賀の家はもうひっくり返るような大騒ぎだったわけです。それでその娘は里へ帰してしまうんです、千葉県ですが。志賀はまたそこへ行ったりして、それで、断然家出することにして。そこに志賀の仲間も集まってきて、やろうやろうと…自分が家出するのじゃない、人の家出を応援して、遠く八王子のほうまで家を探しに行って、で結局良いのがなかったというので家出はやめにして（笑)、それで鵠沼へ来た。かれこれ10日ほど居たのですけれども、その間、「雑誌の話をしているときだけ、ふたりは元気になった」という一節が武者小路の日記にあります。だからふたりは鵠沼というところで、『白樺』のもとを語り合っていたのだろうということになるわけです。

武者小路は大正3年から4年9月まで、まあ10ヶ月ばかりですけれど、鵠沼に滞在いたします。これは彼にとっては大事な時期でありまして、まず、戯曲の「その妹」を書いたのもここですし、また戯曲「わしも知らない」というのが帝国劇場で公演されまして、そこへ毎日毎日行っていたんです。鵠沼から帝国劇場へね、舞台稽古につきあって3日間通いつめたのです。その3日目のとき、夏目漱石を招待した。これも後でお話ししますけども、白樺の連中も漱石の流れのなかに少しは入っているのです。まあ彼の仲間で言うと、長与善郎、詩人の千家元麿、歌人の木下利玄、それから有島生馬とか、こういったような人たちとか、それから岸田劉生、ここの資料展示室の展示（鵠沼ゆかりの文化人展）をごらんになっていってください。

そういったなかで武者小路の暮しもいろんな形で始められますけれども、そこにやっぱり漱石との縁が出てくるのです。強くなってくるのです。なぜかと言うと、『白樺』を出しましたでしょう。そのときに創刊号に武者小路が「それから」についてというエッセイを、まあ評論を書くのです。その『白樺』を武者小路はすぐに夏目漱石に献呈し、それから文通がはじまるのです。だからこれも白樺派が取り持つ縁で、もとはといえば鵠沼ということです。漱石はそのときに返事を書きました。こんな文章です。

「拝啓、『白樺』一号御恵送にあづかり拝受。巻頭の「それから」評、未(いま)だ熟読致さず候へども直ちに一寸眼を通し候。拙作に対しあれ程の御注意をお払い被下(くださり)候のみならず、多大のページをご割愛被下候こと感佩(かんぱい)の至りに候。深く御好意を謝し申候。御批評の内容は未だ熟読を経ざる事故(ゆえ)何とも申上げかね候へども所所肯綮(しょしょこうけい)に当たり候ところも多き様に存知候。中にも「それから」が運河だと云ふのは恐らく尤も妙なる譬喩(ひゆ)ならんと存知候。「それから」のとめ方の御弁護もあの通りの愚見にて候ひし。先ずは御礼迄　草々」

まあ、簡単に言えば非常に丁寧に読んでくださって有難うということなのです。作家というのは自分の作品が、自分が思っていたように、そういう流れの中で読まれることが一番嬉しいわけです。だから、こういうところがよくないと言われても構わないのですが、トンチンカンなところを褒められても、褒められている分には怒りはしないが。特に運河だという評はなかなか面白いと思います。意外にも鵠沼には漱石は来てないのです。江ノ島には来ています。日付日帰りといって夜中になってしまいますから、しょうがないから浜辺で寝て砂だらけになって、あくる日歩いて帰った。歩きですからね昔は。鵠沼には来てませんけど、鵠沼あ

ての手紙はいくつもあるわけです。たとえば、和辻あてのもあるし、武者小路あてのもある。和辻あてのはちゃんと番地が書いてあるのです。だけど、武者小路あてのは神奈川県鵠沼海岸というので来てしまう。良い時代です。今じゃ郵便番号まで書かなきゃならない、面倒くさいです。このときちょっとした面白い話があって、武者小路のことを朝日新聞がちょっとひん曲げた形で悪く言ったらしいのです。そのことについて彼が手紙を出したのです、漱石に。漱石は朝日新聞でしょう。朝日新聞で社員です、一応は。小説を書く社員です。あれを取り消させてくれないかという手紙を書いたらしいのですが、それに対して鵠沼海岸あてに、漱石が返事を書いていまして、ああいうところに書くのは殆どでたらめが多いのだと、とくに当時は、今はプレスコードがあったりしますが、だからあんたみたいな正直な人から見ると嫌だろうけど、すれっからしの言うことだから、あまり相手にしないほうが良いです。つまり私はこの記事を取り消したりするだけの権限は持ち合わせていない。こういうことがあったということは担当者に伝えておこうという要旨です。

「私もあなたと同じ性格があるので、こんなことによく気を悩ませたり、気を腐らせたりしました。然し、こんな事はいつ迄経っても続々出て来て際限がないので、近頃は出来る丈これらに超越する工夫をして居ります。私は随分人から悪口やら誹謗をうけました。然し私は黙然としてゐました。猫を書いた時、多くの人は翻案か、または方々から盗んだものを並べたてたのだと解釈しました。そんな主意を発表したものさへあります。

武者小路さん。気に入らない事、癪に障る事、憤慨すべき事は塵芥の如く沢山あります。それを清める事は人間の力で出来ません。それと戦ふよりも、それをゆるす事が人間として立派なものならば、出来る丈そちらのほうの修養をお互いにしたいと思ひますがどうでせう」

良い手紙です、長者の手紙というのですね。長者は金持ちではなくて徳の高い年配の人を言うんです。漱石の手紙をせっせと読むんですけど、やっぱりさまざまですが、私は特に若い人に対しては、その人にふさわしいようにちゃんと手紙を書いている。たいしたものだと思います。漱石先生は文学者じゃなくても先生として良い先生だと思います。めったにお読みにならないでしょうけど全集などでお読みになれば、また違った漱石像が出来てくるというふうに思います。これは大正4年6月の話でしたけど、7月には例の「わしも知らない」を招待されて漱石は見に行くのです。ちゃんと見に行ったあとで良い面は良い、よくない面は

よくないというふうにきちんとした批評を書いて送っております。

今まで話してきたことから、お分かりだと思いますけど、教養派と白樺派の背景にある夏目漱石の存在は大きいと思います。漱石は鵠沼には来ていないけれど、影は写っているんです。それを今日のお話の最後にしておきたいと思います。

和辻も漱石の弟子といえます。勝手にみんな弟子になるのですが、ずっとあとの人で一番あとが芥川です。芥川が初めて漱石に会って 1 年で漱石は亡くなってしまうんです。だけど、1 年のうちに非常に大きな影響をあたえています。また折があったらお話します。

和辻の育ちの良さを示す良い文章があるんです。それは「夏目先生の追憶」という文章です。初めて漱石に接触しようとした、そのときのことをこう書いているんです。

「十八の正月に『倫敦塔』を読んで以来、書きたかった手紙を、私は二十五の秋にやっと先生に宛てて書いて、それを郵便箱に投げ入れてから芝居に行った。私の胸にはまだその手紙を書いたときの興奮が残っていた。そのときに廊下で先生に紹介された。それまでかつて芝居や音楽会で先生を見かけたことのなかった私が、その日とくに先生と芝居で落ち合わなければならなかったのは、私にひどく不思議に思えた。少なくとも私だけにはその日が只の日ではないようにみえた」

こういうことってあるのです。すべて偶然です。つまり自分が思っていると偶然でなく必然になるという思いが自分の中に残るのです。

だから手紙を読みたいでしょう。私なんかもそう思うんですが、ないのです。漱石の手紙は 2000 何通残って全集に収録されているのです。ところが、漱石に宛てた手紙はほとんど残ってない。何故かというと沢山くるから 2，3 ヶ月で整理されてしまうから残ってない。これが残念。往復書簡が読めれば色々なことが分かって良いのですが、残念！だけどこれはこれだけ書いてあるから、こういう思いで初めて、25 のときに初めて出した…。

漱石の返事はあるのです。大正 2 年 10 月 5 日付けで。

「私はあなたの手紙をみて驚ろきました。天下に自分の事に多少の興味を有(も)ってゐる人はあっても、あなたの自白するやうな、殆ど異性間の恋愛に近い熱度や感じを以って自分を注意してゐる者が、あの時の高等学校時代に、（一高時代に和辻のほうが知っているわけですが）ゐやうとは今日迄夢にも思ひ

ませんでした。夫を聞くと何だか申し訳のない気がしますが、実際其当時私はあなたの存在を丸で知らなかったのです。和辻哲郎といふ名前は『帝国文学』(東京帝国大学の機関誌ですが)で覚へましたが、覚へた時ですら其人が自分に好意を有ってゐてくれる人とは思ひませんでした。私は進んで人になついたり又人をなつけたりする性の人間ではないやうです。若い時はそんな挙動も敢へてしたかも知れませんが、今は殆どありません。好きな人があってもこちらから求めて出るやうな事は全くありません。内田という男が来て、先生は枯淡だと云ひました。然し今の私だって冷淡な人間ではありません。あなたに冷淡に見えたのはあなたが私のほうに積極的に進んで来なかったからであります。(中略)

私は今、道に入らうと心掛けてゐます。たとひ漠然たる言葉にせよ、道に入らうと心掛けるものは冷淡ではありません。冷淡で道に入れるものではありません。私はあなたを悪(にく)んではゐませんでした。然しあなたを好いてもゐませんでした。然しあなたが私を好いてゐると自白されると同時に私もあなたを好くやうになりました。是は頭の論理で同時にハートの論理であります。御世辞ではありません事実です。だから其の事実丈で満足してください。私の処へセンチメンタルな手紙をよこすものが時々あります。私は寧ろそれを叱るやうにします。それで其の人が自分を離れれば已(やむ)を得ないと考へます。が、もし離れない以上私の言ふ事は双方の為に未来で役に立つと信じてゐます。あなたの手紙にたいしてもすぐ返事を出さうかと思ひましたが、少しほとぼりをさますほうがよからうと思って、今迄延ばして置きました」

この手紙から察すれば和辻の手紙がごく色濃いものだった。つまり思いをいろんな形で強くぶつけたものだったのがよく分かるわけです。

この後、和辻は、神奈川県鵠沼 7200 番地、1200 番地か分からないですけど、ここでは 7200 番地へ宛てて、和辻から行った手紙の返事があります。例えば彼が初めて書きました、ゼーレン・キルケゴールという哲学者についての本を送って、漱石にそのお礼の手紙があるのです。また、

「芋を沢山ありがたう。田舎から芋の俵をもらふという事は、何だか野趣があって甚だ愉快です。いつか北海道の南瓜をもらったときのやうな心持がします」

という書き出しのハガキもある。鵠沼は芋がよかったのです。色んな人が書いています。今は鵠沼の芋はないでしょうね。芋小僧のようなのは沢山いるかもし

れませんけど。面白いですね。

それから漱石の手紙というのは、お互いに心の通じると思った人には、割に率直なのです。

「拝復、この夏は大変凌ぎいいやうで毎日小説を書くのも苦痛がない位です。僕は庭の芭蕉のそばに畳み椅子をおいて、其の上に寝てゐます。よい心持でした」

次は松茸です。松茸は松があるからとれるの？買って送ったわけではないでしょうけどね。どうですか？（会場より赤松でないと…と言う声あり）送ったことは送ったのでしょうね。

「なかなか方々から松茸をくれます。この間はある人の奥さんが、ありすぎて困るので少しもらってくれと頼んできました。この松茸は私の子供の時分にはめったに口にすることの出来ない珍味でした。それが今日になると昔を懐古するたびに妙な心持を誘うやうに、松茸が出てくるのだから不思議千万です」

なかなかユーモアがあるでしょう。漱石のユーモアというのは高度なユーモアなのですね。松茸は今でこそ有り難がって神棚へまつらなきゃならないような値段ですけどね。私の子供の頃は田舎から送ってきましたよ。父の姉さんの山口県の小郡から毎年必ず来ました。

和辻も手紙を往復する間にどんどん漱石に惹きつけられていく。でも和辻も初めは小説なんか書いたことがありますので、文学に対するものもあったのでしょう。

この本。『偶像再興』ですけれども…偶像再興という言葉は皆さんには奇妙に聞こえるでしょう。つまり偶像崇拝というのは否定すべきものということで、それを再興するということは本当はおかしいことなのです。偶像は自分が勝手に作った木偶坊（でくのぼう）のようなものですから、今まで偶像否定と言う方向が強かった。だけど、この本でわざわざ偶像再興と言う、再び興すということを言っている。これは和辻の一つの考え方が出ている。要するに否定すべき偶像は否定しなくてはならない。しかし、新しい光を与えることによってそこに蘇りがあるのなら、偶像は再興すべきであるという言い方を彼はしています。こういうところが和辻さんという人を考える場合は、大事なことになると思うのです。

『偶像再興』の序言があるのです。その序言に偶像再興と言うのを要するにキリスト教に寄せて書いている。初めに出てくるのはパウロの話とかがずっとでて

くるわけです。さっき言った新内で涙を流すといった非常にアンバランスといえばアンバランスなのですが、実を言うと人間にはアンバランスはないのです。ちゃんと自分の中ではバランスがとれているから、それに惹かれるのです。ただ、外から見ている奴は分からないから、アンバランスと言っているだけですね。だからやっぱり西洋哲学とキルケゴールと新内は客観的にはどう見ても繋がらないのです。だけど彼の中では繋がっているのです。そこを見てとらないと、人間理解はできないのです。自分の考え方だけでもって、何、そんなものはキルケゴールと繋がるわけもない、そりゃあんたは繋がらない、繋がるわけもない、が自分の中では繋がってみたい。だから、それを一般化してしまうと、理解が非常に薄くなってしまうのですね。

彼は序言の最後のところでこういうふうに言っているのです。

> 予は、（予は…ときたですね、古めかしいですね、まだ若いからこういう書き方をするのですね）予は、道義を説く。愛を説く。ある人はそれを陳腐とよぶだろう。然し予は陳腐なる殻のうちに新しい生命を見出した喜びを語るのである。陳腐なる殻のうちに秘められたる漿液のうまさを伝えようとするのである。陳腐なるものは生命を持たないとする固定観念に捉われたものは、先ずその鈍麻した感覚をゆり起こして、みずからの殻を悟るが良い。そうしてその殻を破るために、鉄槌を振るうが良い。その時に初めて偶像再興に対する新しい感覚が目ざめてくるだろう。

だから、新しい光を当てれば、新しい再興が意味を持ってくるというのです。

> しかし、予はただ「古きものの復活」を目ざしているのではない。古きものもよみがえらされた時には古い殻をぬいで新しい生命に輝いている。

古いものが良いと言っても、ただ古いから良いのではなく、そこに新しい生命が輝くから良いのです。

> 予の目指すのはかくの如き永遠に現在なる生命の顕揚である。予はあらゆる偶像の胸を通ずる一つの大いなる道を予感する。そうして過去未来にわたる全人類の努力が畢竟（ひっきょう）この道に向かって集まっていることを感ずる。永遠に現在なる生命はこの道の上にあって勇躍するのである。予はその光景を描き得んことを願う。

というようなことが書いてあります。精巧な文章ですから、ちょっとお耳だけではお分かりにくいかと思いますが、簡単にいえば、古いものの復活を目ざす、そこに新しい光がさすから目指す。これは、大正教養派というのは、陳腐なもの

は生命を持たないとする固定観念にとらわれた者は、この鈍った頭を揺り起こして、自らの殻を破るが良いと書いているのです。固定観念をいかに壊していくか、そのためには柔軟さが必要なわけです。柔軟さは怖いのですけど、怖いというのは何故かというと、柔軟さという言葉はいわゆる頑固という言葉より良い言葉なのです。だけど、柔軟さはどこか良い加減さに通ずるのです。頑固は良い加減には繋がらないのです。だから言葉にはそういう面がありまして、良いとか悪いとか簡単にはいえないのですけれども、だんだん年をとってくると、新しい光を取り入れるのが面倒臭いでしょう。そうすると、どうしても固定観念が働いてしまうということになるのです。ただ、少なくとも一概には否定はしないということは大事なのです。そりゃだめだとか、そりゃ食えねえとか言ってしまったら、それでおしまいなのです。それもあるかもしれない、だけど私は今それに同調できない、する気はない、ということをはっきりさせていかなくてはならない。

但し、自分が同調する気がないから、これは存在価値がないというふうに決めてしまうのは駄目なのです。つまりそれは単なる頑固になるのです。

そういう柔らかさ、そのために何をすべきか、それは本を読んだり、ご自分ができることをいろんな形でしていくことが柔らかさに繋がります。そういう意味では大正教養派も決して捨てたものではないのです。

大正教養派に話が行き過ぎて、もっと白樺派の話もしたかったのですが、時間がありません。最後になりますが、こうやって広く見ていって、今までは大体は白樺派は白樺派、大正教養派は教養派という形で決めてしまっていたのでしたが、そこに大きな背景として、夏目漱石を入れてくると、かなりそこに柔らかな波がお互い通い合っているということが分かります。漱石は何もかも、それは良いと言ったばかりではないのです。あの人は大体弟子への手紙でも、悪いことはそれははっきり間違っているといえる人ですから。

今日の話の中でもっとも大きなポイントは、今まで白樺派と大正教養派という形では、ご存知だったと思いますが、そこに漱石の影が色濃く映っていることを、改めて見直していくべきではないかということです。少し話しが面倒になったかもしれませんが、話を閉じたいと思いますが、先ほど申しましたように偶像再興の中に、お読みしました序言の中に、もう一回読みますと……

> 古きものも蘇らされたときには、古い殻を脱いで新しい生命に輝いている。そこにはもはや、時間の制約はない。それは永遠に若く永遠に新しい。予のめざすのはかくの如き永遠に現在なる生命の顕揚である

これはまさしく教養派の宣言なのです。要するに新しい生命に輝くというのが常に価値なのです。だから偶像再興も意味があるのです。これからいけばお互いに常に毎日どこかで古い殻を脱いで、新しい生命に輝くことが非常に意味があると思えるのです。

こういう一方で、武者小路は『白樺』刊行の言葉で

「白樺」は自分たちの小なる力で作った小なる畑である。自分たちはここに互いの許せる範囲で自分勝手のものを植えたいと思っている。そうして出来るだけその畑をうまく利用しようと思っている。

これが創刊号の創刊の言葉です。実にユニークな言葉です。武者小路という人は非常にユニークな人です。文章を見ても。ここで大事なことは自分勝手なものを植えたい、自分勝手と敢えて言ってるのです。今までの明治からの改革もそうですが、自分勝手というのはもっとも否定されるべき言葉でしょう。自分勝手でやって良いのか、子供の時に父さん母さんに、そう怒られた人もいると思うのです。その自分勝手に敢えて積極的な意味をつけて古いものを新しく転換させているわけです。だから和辻は私に近いですが、武者小路は別格ですね。

武者小路は戦後に「馬鹿一」とか「真理先生」とか晩年に書いたものがありますでしょう。これも私は好きです。

基本的には互いに許せる範囲で自分勝手なものを植えたいという宣言、これが時代的には非常に大きな意味を持ってくる。何故こんな話をしているかというと、私たちが、現代を考える場合、若者たちを考える場合に、やはり固定観念ははずさないとだめだと言う。彼等もひょっとしたら、自分勝手なものを植えるということをやっているのではないか、但し、互いに許せる範囲で、と書いてある。互いに許せない範囲では困るのです。

だけど、敢えて今まで負の言葉であった「自分勝手」を正の言葉に換えて使っているところが、彼の一つの覚悟であると思えます。この背景にあるのが自由主義なのです。思想の問題になりますが…。

私は和辻の言うように永遠に現在なる生命、殻を背負っている、これをはずせば常に人は現在に永遠に生きているという状況を、繰り返し確かめていかなくてはならないと思います。そうしないと単なる懐古趣味になってしまう。昔はよかったね、松茸安かったね、と言ってみてもそこから一歩も出ないです。現代に生きる以上、現代の人間として現代を生きなきゃならない、そんなもの歳には関係ないです。思想でいえば今の若者の思想、思想なんてあまりないのですよね今の

若者はね。私たちの思想のほうが先へいっていると思っても良いということなのですよね。

結局、白樺派にしても教養派にしても、今までとはまったく異にした新しい理念を持っているというところが大きな意味を持っていると思います。ただ、ここでちょっと現在に触れれば、現代は理念が喪失している時代というふうにも思える。理念で動いたのは私ら世代、大正教養派。今は理念で動くより現実で動く。

どちらが良いということではないのです。そういう流れが今大きく世界を流れていると思います。だから言葉だけでいえば、理念で動くという場合に、その理念を現代とどう関わらせるか、現在とどう関わらせるか、というのが大きな問題です。現在を生きると言うならば、その現在を理念とどう関わらせるかということ、それが二つ交差していけば、まともな社会が続く。だけど交差しなくなったら、分裂しかありえないでしょう。

つまり今まで話してきたことは現代の大きなテーマだと思えます。だから彼等は新しい時代に歩を進めていくということで、そういう点からいうと、鵠沼はその新しい息吹を育てたという、畑なのです。そう思うと私は片瀬ですが、鵠沼とはお隣同士ですから、愉快な気持ちになります。

しかもそこに漱石先生が関わってくると思うと、なお愉快です。鵠沼は大事な土地なのです。鵠沼を語る会は大切な集まりだということを再認識し、また皆さんにも再認識して頂きたいということで、私の話は終りにしたいと思います。

（盛大な拍手）

[テープ起こし：岡田哲明・原　雅子]

*　　*　　*

講師略歴

1926年　東京生まれ　**1946年**より片瀬在住

1948年　東京高等師範学校卒業、神奈川県立湘南高校に**1973年**まで勤務以後、横浜日野高校、野庭高校の教頭、校長を歴任

1981年　藤沢市教育委員会教育長

1985年　神奈川文学振興会参与。現在、同評議員

会誌『鵠沼』記念号の発行

渡部　瞭(会員)

本誌 17 ～ 19 ページをご覧になると判るように、会誌『鵠沼』は当初不定期に発行されていた。これが現在見るような形になったのは、1998 年の第 76 号からで、鈴木編集長が着任されて以来である。さすがに我が国を代表する名編集長というべきであろう。

以来、年 2 回 3 月末と 9 月末に発行するという基準が守られている。表紙のデザインも現行のスタイルに定着した。内容も充実した格調高いもので、一地方公民館サークルの 200 部程度発行の手作り会誌としては、出色のものと自負して良かろう。事実、知る人ぞ知るという存在ながら、ご好評をいただいている。隠れファンも少なからず存在するようだ。

さて、本年度の『鵠沼』は、会の創立 30 周年という節目の年を迎え、2 回とも記念号と位置づけ、これまでのしきたりを破ったスタイルになった。

第91号　　2005年11月30日発行

戦後 60 年という節目の年を迎え、「 語り継ぐ戦中・戦後の記憶」という大特集を組んだ。会員全員の戦中・戦後の記憶を 1 ページずつ書いていただこうというものである。類似の企画は、すでに 1980 年の第 9 号に「1980 年の会員の声」というものがあるが、それ以来の試みということになる。第 9 号のものは、いわば「年頭所感集」で、数行程度の簡単なものだったが、戦中・戦後の記憶となると重みが違う。1 ページずつという制約をはみ出す会員が半数にのぼり、編集に苦労した。冒頭には鈴木会員と内藤会員のためにページを割いた。日本史に残る汚点と鵠沼という地域の戦史を記録したかったからである。

これが発表されるや、鈴木氏は各種メディアの取材責めにあい、「渡部さん、恨みますよ。」と漏らされた。

この号は第一に執筆者数がべらぼうに多かったり、原稿提出の形態が不揃いだったり、原稿提出が大幅に早すぎたり遅すぎたり諸般の事情で刷り直しをするという 30 年の歴史で未曾有の大ポカをしでかした。もうこりごりである。

第92号　　2006年3月31日発行

この号である。ご覧のように「鵠沼を語る会 30 年の歩み」と「創立 30 周年記念事業のまとめ」の二部構成になっている。

前半のうち20ページほどを割いて資料集のごときものを置いた。大部分は「鵠沼ゆかりの文化人展」の際、廊下に展示したものを整理したもので、竹内会員の調査による。

後半のうち20ページを占めるのは、小山文雄氏の講演記録である。テープ起こしは岡田・原編集委員が分担した。生まれて初めての経験ということで、ご苦労が多かったことと思う。おかげで格調高い内容になった。感謝したい。

（わたなべ　りょう）

記念植樹

穴山雄一（会員）

3月14日の例会の後半、公民館の裏庭において鵠沼を語る会創立30周年記念植樹が行われた。紅白の短い幔幕が彩りを添え、有田会長と渡辺公民館長それぞれの挨拶の後、あらかじめ園芸業者によって準備されていた枝垂れ桜の苗木の根元にで酒が注がれ、木製の記念板の序幕を行い、参加者全員が乾杯して、型どおりの式典を終えた。

植えられた桜について

埼玉県さいたま市（旧与野市）の円乗院にある市指定天然記念物で推定樹齢260年の千代枝（せんだい）垂桜と同じ種類です。

枝垂桜として有名なのは、京都の円山公園、平安神宮、東京の六義園、山梨県の恵林寺、身延山、福島県三春の滝桜、小田原の長興山などが、古木で巨大樹として親しまれています。

（あなやま　ゆういち）

前半のうち20ページほどを割いて資料集のごときものを置いた。大部分は「鵠沼ゆかりの文化人展」の際、廊下に展示したものを整理したもので、竹内会員の調査による。

後半のうち20ページを占めるのは、小山文雄氏の講演記録である。テープ起こしは岡田・原編集委員が分担した。生まれて初めての経験ということで、ご苦労が多かったことと思う。おかげで格調高い内容になった。感謝したい。

（わたなべ　りょう）

記念植樹

穴山雄一（会員）

3月14日の例会の後半、公民館の裏庭において鵠沼を語る会創立30周年記念植樹が行われた。紅白の短い幔幕が彩りを添え、有田会長と渡辺公民館長それぞれの挨拶の後、あらかじめ園芸業者によって準備されていた枝垂れ桜の苗木の根元にで酒が注がれ、木製の記念板の序幕を行い、参加者全員が乾杯して、型どおりの式典を終えた。

植えられた桜について

埼玉県さいたま市（旧与野市）の円乗院にある市指定天然記念物で推定樹齢260年の千代枝（せんだい）垂桜と同じ種類です。

枝垂桜として有名なのは、京都の円山公園、平安神宮、東京の六義園、山梨県の恵林寺、身延山、福島県三春の滝桜、小田原の長興山などが、古木で巨大樹として親しまれています。

（あなやま　ゆういち）

「鵠沼を語る会」活動の記録

（平成17年10月～平成18年3月）

総務部

第8回実行委員会、運営委員会、　9月27日(火)　15名出席

平成17年10月例会　10月11日(火)　10時～12時　25名出席

議題1. 公民館まつりについて—11月5日(土)、6日(日)に行われる公民館まつりの当番について、駐輪場は綿谷会員、パネル撤去は浅野会員に決めた。**(有田)**

2.「鵠沼ゆかりの文化人展」について—鵠沼郷土資料展示室との共催の30周年記念事業であるので、会を挙げて取り組むべきこととして、12日～14日の直前準備とその後の受付当番について、実行委員を中心に全員で協力することにした。**(有田、内藤、竹内)**

3. 11月3日(木)の特別講演会について—テーマは「鵠沼の残照～白樺派と教養派」である等の説明があり、例会出席者全員による会場準備、後片付け等の協力を依頼した。**(渡部、竹内)**

4. 会誌・記念号「鵠沼91号」の配付について—出席会員に渡し、他は配付表によって担当者に配付を依頼した。**(岡田)**

5. その他—例会終了後、鵠沼郷土資料展示室にて出席した会員多数が、中島委員長より資料室の当番の要領について説明を受けた。

第9回実行委員会、運営委員会　10月25日(火)　14名出席

平成17年11月例会　11月15日(火)　10時～12時　19名出席

(11月例会は公民館まつりの関係で、第三火曜日に行われた)

議題1. 会誌・記念号「鵠沼91号」について—先月発行した記念号に、誤字、脱字が多くあることがわかり、後日訂正版を発行することになった。**(有田、渡部)**

2. 11月3日(祝)の特別講演会報告—120名出席、長唄のテープを流す等、小山先生の熱のこもった講演に多くの出席者が感銘を受けた。**(竹内)**

3. その他(1)記念植樹の銘版が探求クラブの黒川さんによって完成した。**(穴山)**

(2)「会」の紹介が11月10日号の市広報「市民の広場」に掲載された。**(有田)**

4. お話—10月15日より開催中の展示資料室と共催の、「鵠沼ゆかりの文化人展」を観覧し、「映像、舞台、美術、学術、文学及び鵠沼を語る会のあゆみ」各部門について展示担当者より説明があった。**(岡田、渡部、中島、内藤、竹内)**

議題 1. 新年会の会計報告— 担当幹事より収支の報告があった。**(佐藤)**

2. 公開講座について—2 月 25 日(土)の公開講座について、会場準備、設営、受付等の役割分担を決めた。**(竹内)**

3. 会誌「鵠沼」92 号について—創立 30 周年記念事業のまとめとしたい。特に特別講演会の小山先生のテープ起こしには苦労しているとのこと。**(渡部)**

4. その他(1)3 月例会後の記念植樹について—1 週間前に記念樹は公民館に到着し、所定の場所に植えておく、当日はセンター長にも出席してもらって乾杯等の簡単なセレモニーを行うので、出席している全員の参加を要請した。**(穴山)**

(2)資料室展示について—資料展示室で 2 月 15 日(水)～5 月 15 日(月)まで鵠沼村の時代、なつかしき学び舎「湘南学園」の展示が行われている。**(内藤)**

お話—有田、佐藤会員より、[芥川龍之介の短編「悠々荘」は何処?]の話があった。大正 15 年 10 月に書かれた短編を朗読し、姪の葛巻左登子さんの文章や、岸田劉生の「劉生日記」、昭和 7 年に越してきた現住者の証言等から当時の持ち主は二宮さんで、松が岡 4 丁目の阿部さんと中島さんのところが「悠々荘」の場所であったと推理するミステリヤスな話に深い感銘を受けた。

新入会員　宮戸　光氏　紹介

第 13 回実行委員会、運営委員会　　2 月 28 日(火)　　15 名出席

平成 18 年 3 月例会　　3 月 14 日(火)　　10 時～11 時　27 名出席

議題 1. 公開講座「鵠沼らしさは何か」の報告—参加者一般 33 名、会員 23 名計 56 名、パワーポイントを使った渡部会員の話は分かりやすく好評だった。**(竹内)**

2. 会誌「鵠沼」92 号の印刷、製本日について—3 月 31 日付け発行、部数 200、3 月 29 日(水)10 時より印刷、11 時より製本を開始するので会員多数の協力を要請した。**(渡部)**

3. その他—(1)「鵠」の字体について、先の公開講座の席上で参加者より左の偏の字体が牛に口か、告かどちらが正しいかとの質問があり、杉本会員が調査した資料によると、国語審議会では牛に口の字体が望ましいとしている。**(有田)**

(2)植樹する「しだれ桜」は、埼玉県与野市にある圓乗院の「千代しだれ桜」から出たもので由緒あるものとのこと。**(穴山)**

植樹セレモニー　例会終了後センター裏庭にて、会員 27 名、渡部センター長、角田館員が出席し、清めの清酒を注ぎ、全員で乾杯して植樹を祝った。これで会誌発行を除く、全ての 30 周年記念行事が無事終了した。(文責　中島　明)

編集後記

＊鵠沼を語る会創立30年記念事業も今号の発行をもって大団円ということになります。思えば色々忙しい一年でした。

＊たかが30年ですが、30年もたつと様々なことが忘却の彼方に過ぎ去っていることに驚かされます。第一に、創立当時のメンバーは、誰一人生き残っていません。今日のメンバーはいわば後継者集団です。

＊冒頭の「生い立ち」は、中でも古いメンバーである有田会長と佐藤和子会員にお願いしました。当初、「生い立ち」とは誕生当時のことを書けばよいと思われたらしく、２ページ分を書かれたのですが、実は編集側はそれ以降今日に至るまでの活動についても書かれることを期待していたのです。「せめて東屋の碑のことだけでもお書きください」ということで、３～４ページを加えていただきました。

＊53～54ページにも記しましたが、略年表・歴代会長・項目別活動状況は、「鵠沼ゆかりの文化人展」の際、廊下に展示した「鵠沼を語る会30年の歩み」の内容を担当者竹内会員のハードディスクからメールで送っていただき、整理したものです。

＊鈴木前編集長は、編集長就任当時から会の活動史をまとめたいというご意見をお持ちで、総会で提案され議決された記録が残っていますが、今回はからずもその夢の一端が実現することになりました。

＊これも53～54ページに記しましたが、小山文雄氏の講演記録は、岡田・原両編集委員の大変なご苦労の結果まとめられました。各種文献からの引用が多いため、図書館を回って原典に当たり、正確を期したということです。

＊その際、漱石全集の書簡集に面白い記事があることが発見されました。

大正4年9月14日（火）　武者小路実篤宛　はがき

御本※を有難う御座います。一部はたしかに小宮※が来た時に渡します。或は此方から送ってやります。兎に角御寄贈の事丈はすぐ知らせてやります。鵠沼はもう引上げたのですか。近頃あなた方の連中は吾孫子方面に移るぢゃありませんか。あなたが吾孫子へ図書館を建てゝゐるといふのは本当ですか。　※*御本＝『向日葵』　小宮＝小宮豊隆*

＊「鵠沼ゆかりの文化人展」の別冊発行期日は未定です。　（渡部）

『鵠沼』　第92号
平成18年３月31日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行　鵠沼を語る会
藤沢市鵠沼海岸2-10-3
鵠沼公民館内
電話0466-33-2002

URL=http://kugenuma.sakura.ne.jp/